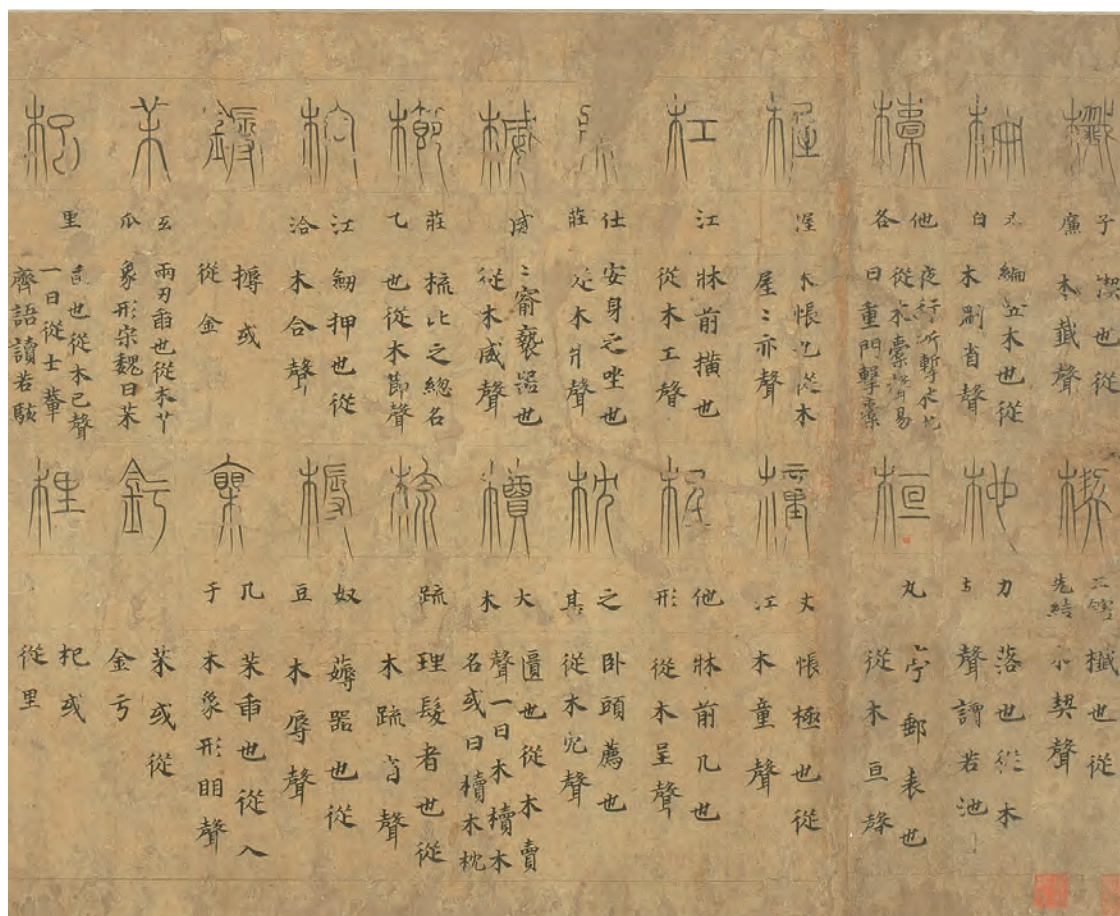




第77回 杏雨書屋特別展示会

「杏雨書屋の善本漢籍 — 恭仁山莊本を中心に —」

2023 年 10 月 28 日(土)～12 月 1 日(金) ※ 10/28・29,11/4・23を除く土日祝は休館



表紙図版

国宝 説文解字木部残卷 (恭67 : 12頁参照)

杏雨書屋の善本漢籍 —恭仁山莊本を中心に—

杏雨書屋運営協議員 麥谷 邦夫

杏雨書屋には、現在国宝3点、重要文化財14点の貴重な書籍が所蔵されている。実はこのうち国宝全点、重要文化財3点は、いずれも恭仁山莊善本と名づけられた文庫に収められている。全97点の書物からなる恭仁山莊善本は、東洋学の泰斗であり京都支那学を代表する学者であった内藤湖南（名は虎次郎、字は炳卿。1886～1934）の蔵書中、とりわけ貴重な書物ばかりを集めたものである。その名は、湖南が京都帝国大学教授を退任後に居を定めた京都府相楽郡瓶原村（現木津川市加茂町）の恭仁山莊に由来する。ここには数万冊にのぼる蔵書が収められていたが、湖南の没後、その一部が六代武田長兵衛氏の有に帰した後、杏雨書屋に入った。多くは漢籍や漢籍の古い鈔本であるが、弘法大師空海や五山の禅僧の著作など貴重な和書も含まれている。

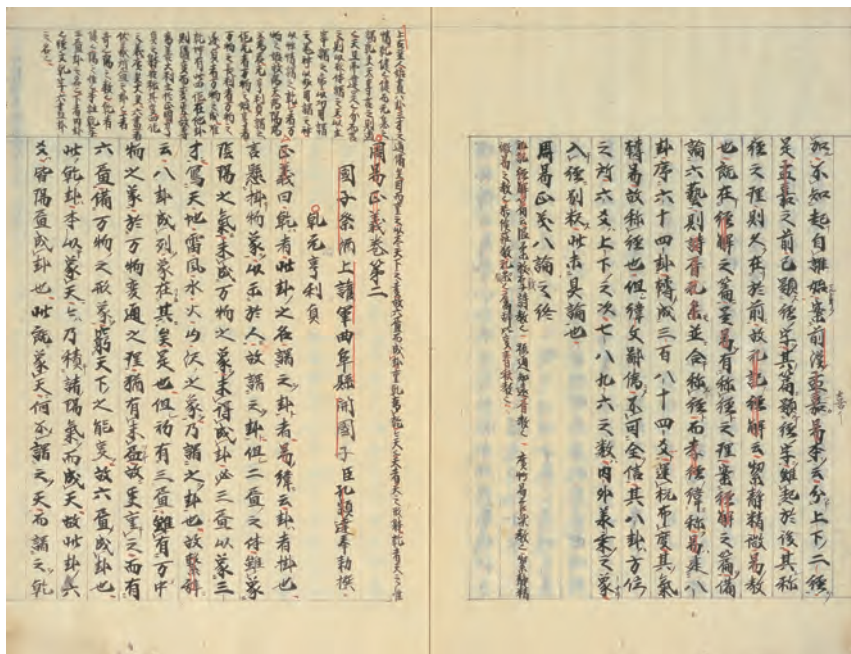
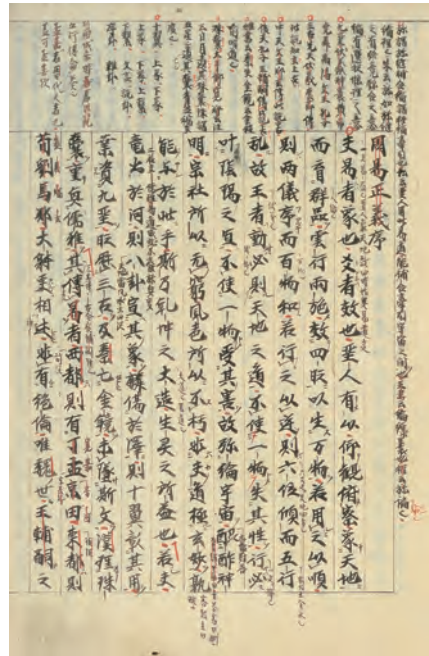
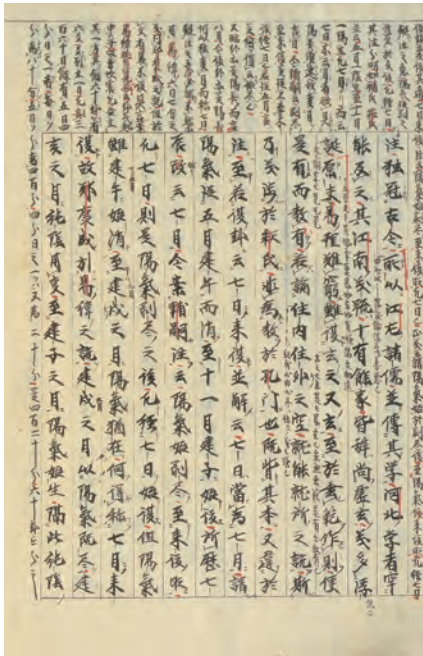
恭仁山莊善本の展観は、昭和10年（1935）に大阪府立図書館で初めて行なわれ、それを記念して『恭仁山莊善本書影』が刊行された。その後半世紀を経て、昭和60年（1985）に山鹿誠之助氏の解説を付した『新修恭仁山莊善本書影』が杏雨書屋から刊行されたのを記念して、同年5月と11月の2回にわたって展示会が行われた。また、平成25年（2013）に杏雨書屋が十三から現在地に移転した際にも主要な恭仁山莊善本が展示されたが、その後はまとまった展示は行われてこなかった。今回の展示では、恭仁山莊善本の漢籍のうち、国宝3点、重要文化財2点を含む35点と、重要文化財2点を含むその他の杏雨書屋所蔵漢籍10点の全45点を展示する。漢籍とは、近代以前の中国人の著作、およびその鈔本や刊本、またはそれらを日本で刊行した和刻本などの総称である。和漢にわたる恭仁山莊善本の中から漢籍に限って展示したのは、戦前の京都支那学を牽引してきた湖南の足跡を垣間見るのにふさわしいと考えたからである。

杏雨書屋の蔵書といえば、一般には和漢の医学、本草学関係のものが中心と思われるかも知れない。もちろんそのことに間違いはないのであるが、恭仁山莊善本を筆頭として、羽田文庫の敦煌写本（敦煌秘笈）、仏典の磧砂版大蔵経など、中国学全般にかかわる貴重な漢籍も数多く所蔵されている。恭仁山莊善本漢籍と合わせて展示することで、杏雨書屋所蔵図書の幅広さを実感していただくことを期待している。古来、漢籍の分類は、中国古代の学術を反映した経・史・子・集の4部に分ける方法が取られてきた。今回の展示では、このような漢籍の伝統的分類法に従う配置をしてある。

なお、展示解説については、『新修恭仁山莊善本書影』および過去の展示会図録の解説を参照した。

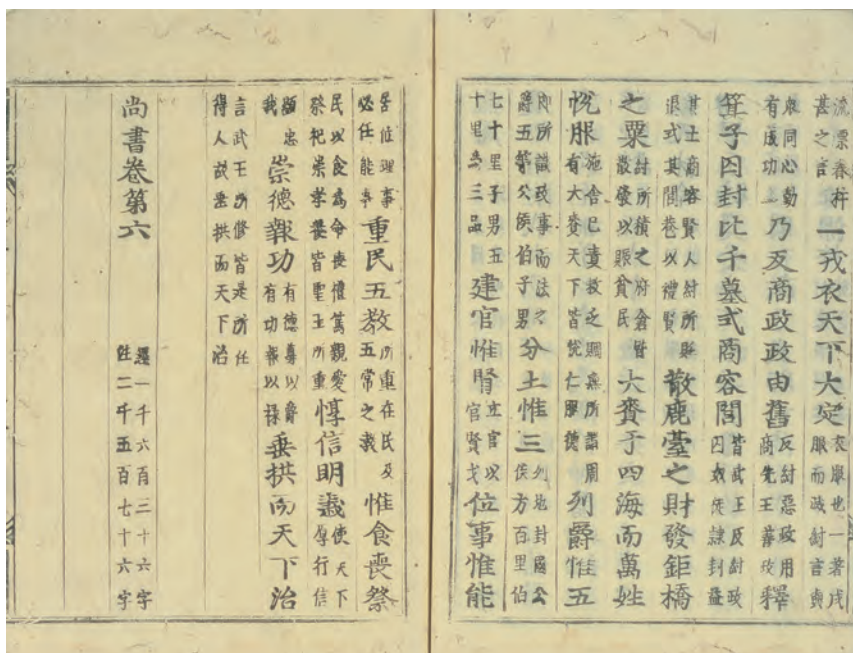
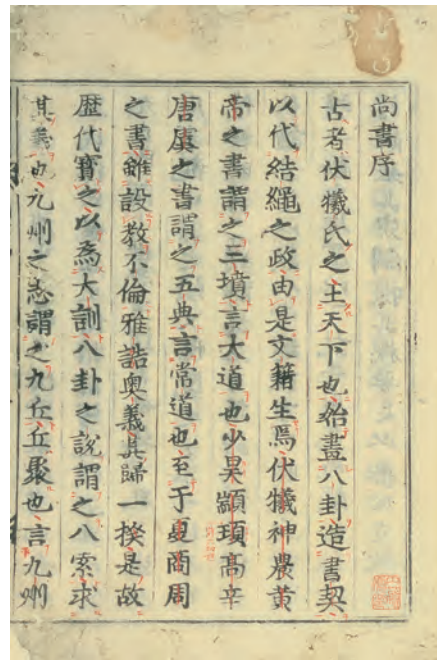
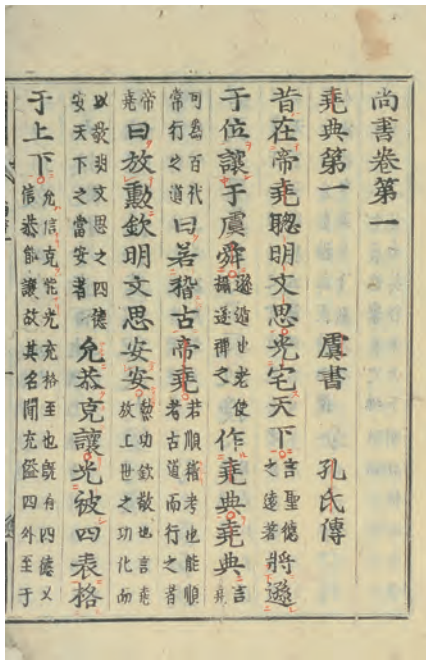
1 周易正義 14 卷 7 冊 旧鈔单疏本 (恭80)

『周易』は「易経」ともいい儒家の五経のひとつ。易には夏、殷、周三代それぞれの易があり、周代のものを周易という。本書は、唐代に孔穎達(574~648)らが勅命を奉じて撰述した『周易』の疏(注釈)で、経文と注文を持たず疏のみから構成されるいわゆる单疏本である。書写年代などに関する奥書はないが、南宋覆刻本の鈔本をもとに織豊期に伝写されたと考えられている。全巻に朱点および墨書の返り点がある。送り仮名を施し、眉欄および行間には諸本との異同や訓義などを注記している。



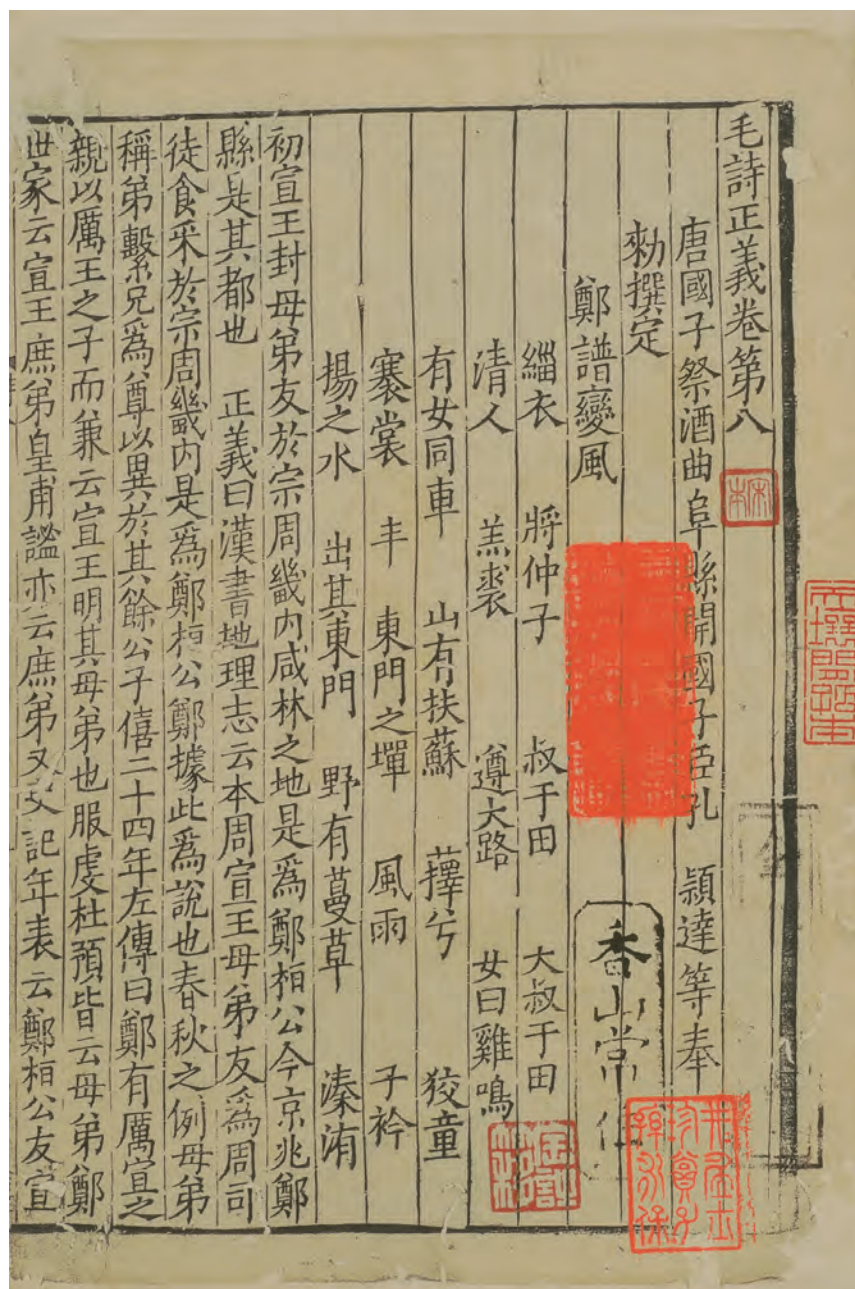
2 尚書 13卷4冊 元和寛永中活字本 (恭44)

『尚書』は「書経」ともいい儒家の五経のひとつ。本書は、前漢の景帝(在位前157～前141)の時、孔子の旧宅の壁中から発見された篆書以前の蝌蚪文字(古文)で書かれた古文尚書に孔安国が伝(注釈の一種)を施したもの。孔安国伝の古文尚書に関しては古来その真偽が問題とされてきたが、仮託による偽書であることは後代の定論となっている。本書は、無刊記の活字本で、慶長年間(1596～1615)に刊行されたものの後刷と考えられている。褐色の原表紙を存する。



3 毛詩正義殘本 17冊 南宋刊單疏本 (恭1) (国宝)

『毛詩』は「詩經」ともいい儒家の五經のひとつ。本書は、唐代に孔穎達らが勅命を奉じて撰述した『毛詩』の疏(注釈)で、經文と注文を持たず疏のみから構成されるいわゆる單疏本である。全40巻のうち首7巻を欠く。宋の太宗の端拱元年(988)に五經正義を校勘して刊行させたが、『毛詩正義』は淳化3年(992)に完成した。その後、南宋の紹興9年(1139)にあらためて紹興府で覆刻させたものが本書である。宋刊の單疏本は中国では早くに亡佚してしまっており、現存するものは本書のみである。「金沢文庫」「香山常住」の黒印などがある。



國云治故思之 鄭唯說伯有異其文善乎同 傳伯有至
述職 正義曰以經言郇伯嫌是伯爵故言郇伯郇侯也知郇爲
侯爵者定四年左傳祝鮀說文王之子唯言曹爲伯明自曹以外
其爵皆尊於伯故知爵爲侯也諸侯有事二伯述職謂東西大
分主一方各自述省其所職之諸侯也昭五年左傳云小有述職
大有巡功服虔云諸侯適天子曰述職謂六年一會王官之伯命
事考績述職之事也 箋有王至之功 正義曰莊二十三年左
傳曰諸侯有王王有巡守巡守是天子巡省諸侯則知有王是諸
侯朝聘天子恩古明王賢伯輒言諸侯朝聘天子者若上有明王
下有賢伯則諸侯以時朝聘善惡則有黜陟之義大司馬掌九伐
之法正邦國賊賢害民則伐之爾時諸侯必不敢暴虐今由無明
王賢伯不復朝聘共公侵刻下民無所畏憚故思治世有朝聘之
時也僖二十四年左傳說富辰稱畢原鄭文之昭也知郇伯是
文王之子也時爲州伯有治諸侯之功謂爲牧下二伯治其當州
諸侯也易傳者以經傳考之武王成王之時東西大伯唯有周公

召公大公畢公爲之無郇侯者知爲牧下二伯也

毛詩正義卷第十二

計三萬三千五百三十六字

金澤之庫



夫皇太子右贊善大夫臣畢道昇奏
朝請郎守殿中丞賜鮮魚袋臣胡今商再校
中散大夫守國子祭酒魚尚書工部侍郎桂國會稽縣
開國男食邑三百戶賜紫魚袋臣孔維都再校
宣德郎守尚書水部員外郎直史館判國子學桂國賜鮮魚袋臣李鳳都再校

淳化三年壬辰四月

日朝散大夫給事中參知政事桂國賜

紫魚袋臣李沆等進

正奉大夫給事中參知政事上柱國襄陵郡開

國侯食邑一千戶賜紫魚袋臣賈黃中

推忠協謀佐理功臣金紫光祿大夫尚書吏部侍

郎同中書門下平章事上柱國清河郡開國

侯食邑一千戶食實封貳伯戶臣張齊賢

推忠協謀同德佐理功臣金紫光祿大夫尚書右僕

射兼中書侍郎同中書門下平章事監修

國史上柱國隴西郡開國侯食邑三千一百戶

食實封陸伯戶臣李昉

紹興九年九月十五日紹興府雕造

校對官右迪功郎監潭州南嶽廟韓彰

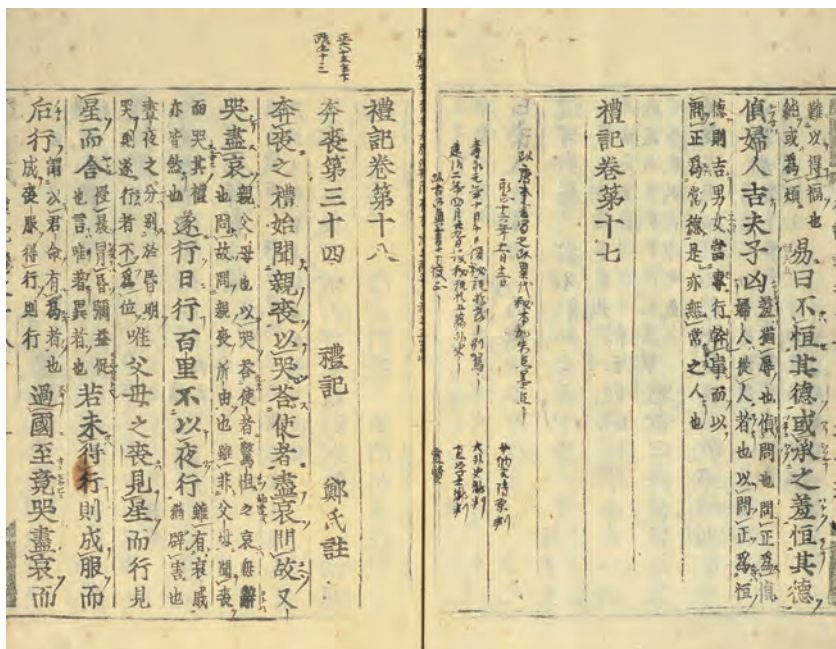
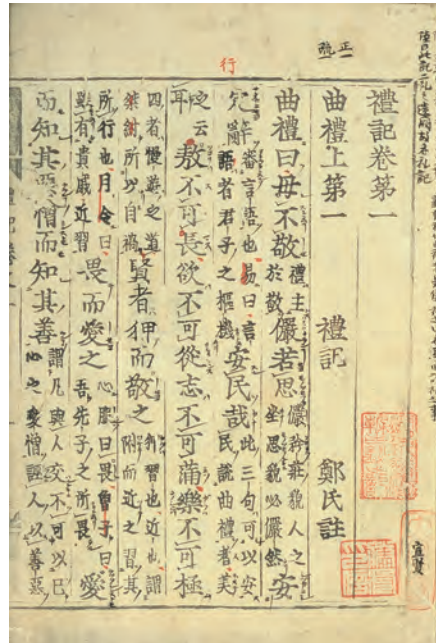
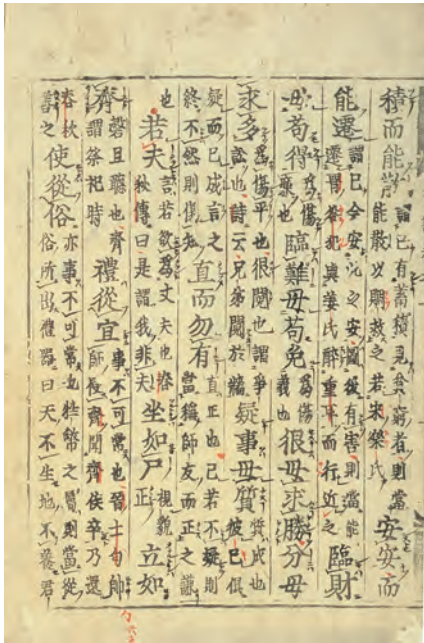
校對官右迪功郎監潭州南嶽廟程淮

管幹雕造官右文林郎紹興府觀察推官曾拔

管幹雕造官右丞直郎紹興府觀察判官白良

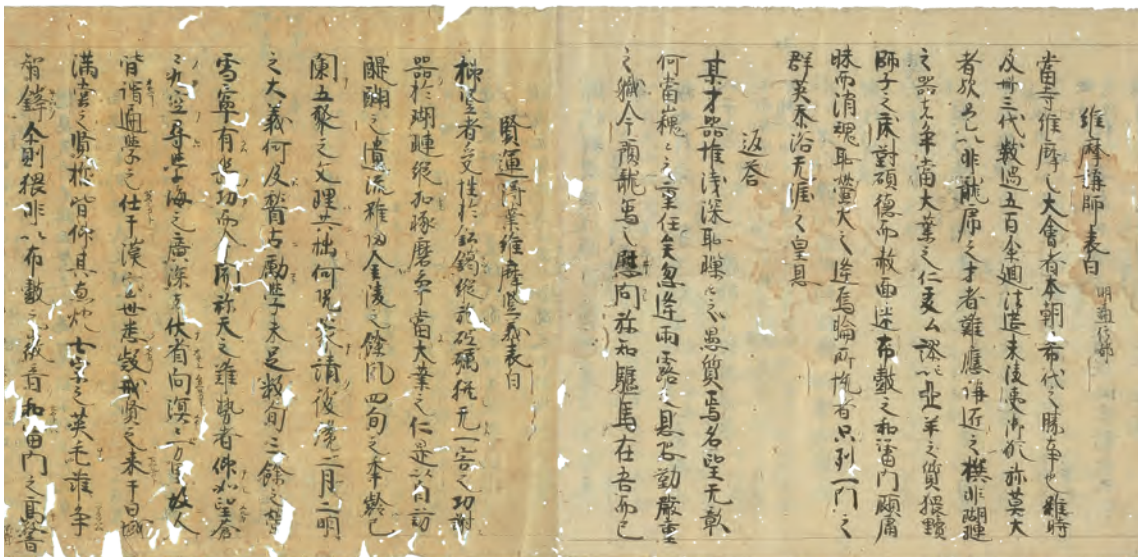
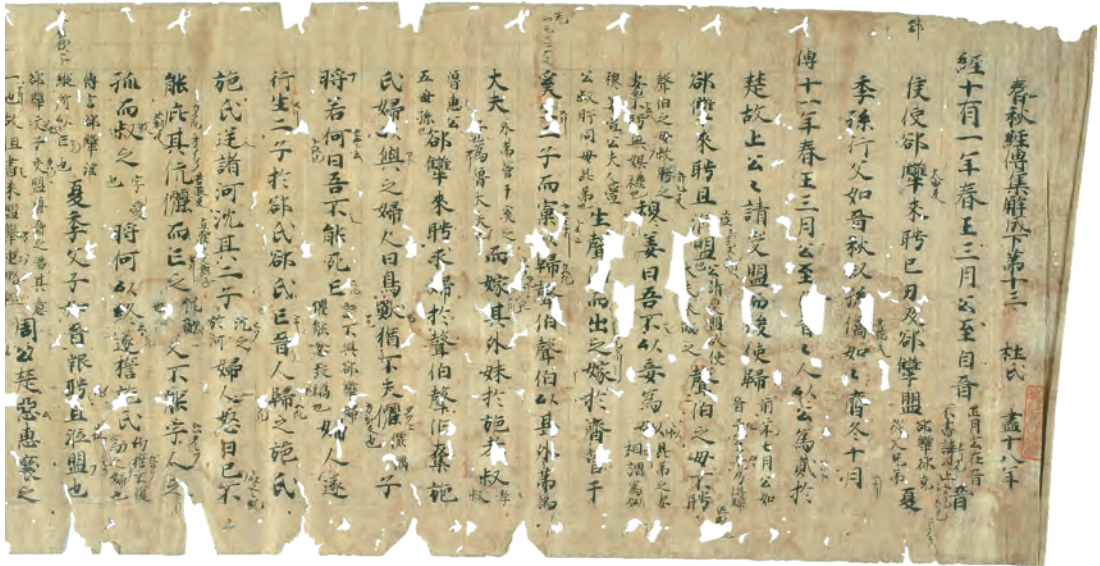
4 礼記 20 卷 10 冊 慶長元和間活字本 (恭46)

『礼記』は儒家の五経のひとつで、周末から秦、漢にかけての古礼に関する諸説を整理編集したもの。本書は、毎冊巻首に「大寧院」の印記を捺す。巻1のみ朱点がある。全巻に墨書で返り点、訓点、反切等の書き入れを施し、また複数巻の巻末に鎌倉および室町時代の年紀を有する奥書を移写しており、平安朝以降、清原家の秘本によって訓点を移記したものであることが知られる。



5 春秋經伝集解残卷 4 卷 平安朝鈔本 (恭70) (重要文化財)

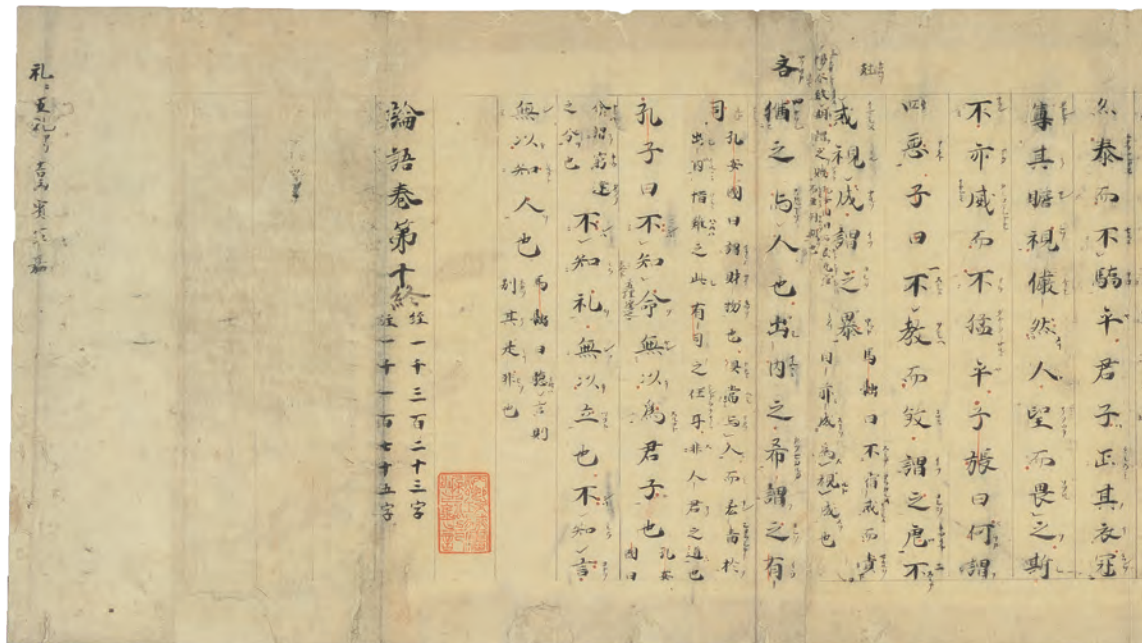
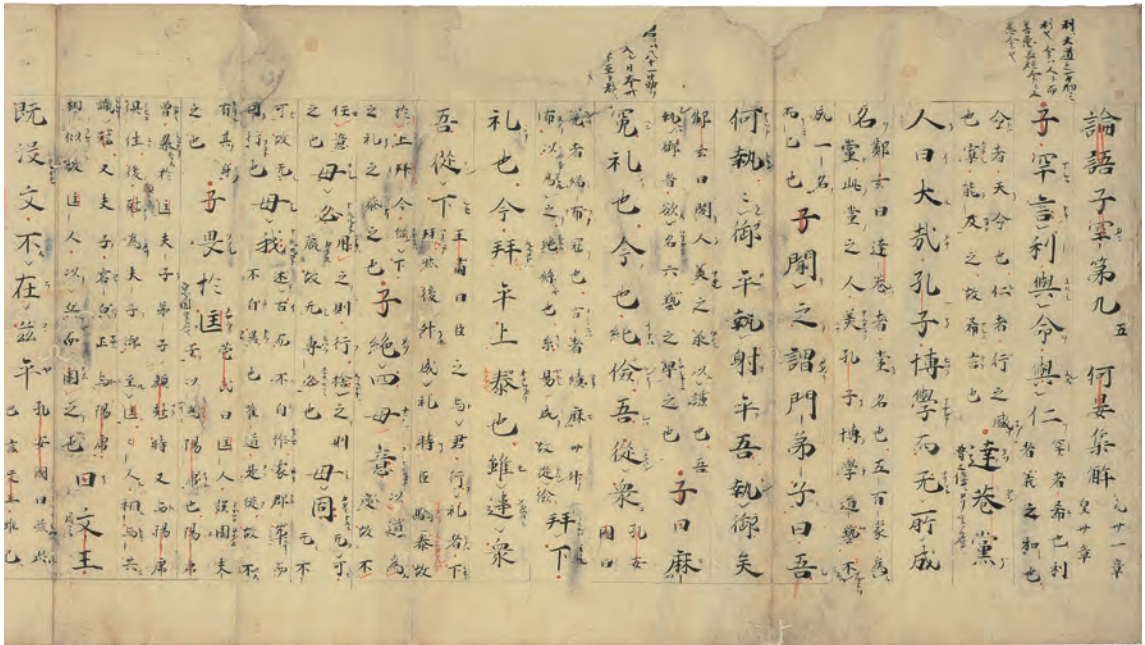
『春秋』は孔子の編纂した魯国 12 公の年代記で、儒家の經典のひとつ。その古い注釈には「左氏伝」「公羊伝」「穀梁伝」の 3 伝があり、本書は「左氏伝」に晋の杜預 (222~84) が注釈を施したもの。巻 6、13、16、19、29 を存する。各巻に朱墨の加筆があるが本文とは別筆であり、また朱書でヲコト点や声点を付し、墨書で訓義や反切その他を注記する。本書の紙背には、12 世紀後半の醍醐寺関係の表白、願文、祈願詞、諷誦文、請文、申文などが多数書写されており、史料的にも価値がある。



紙背

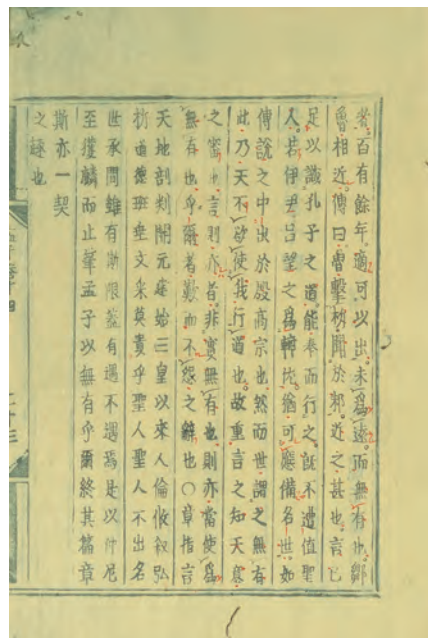
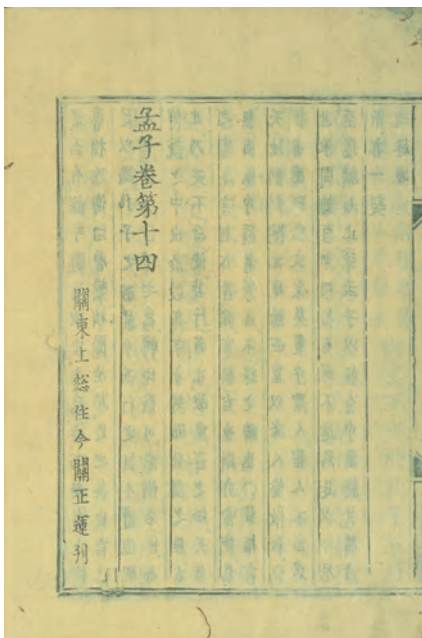
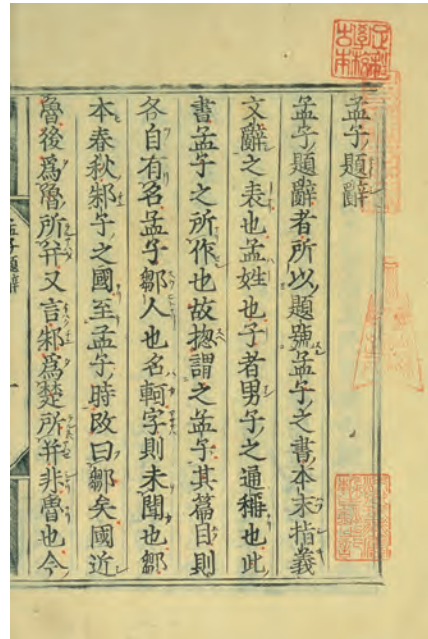
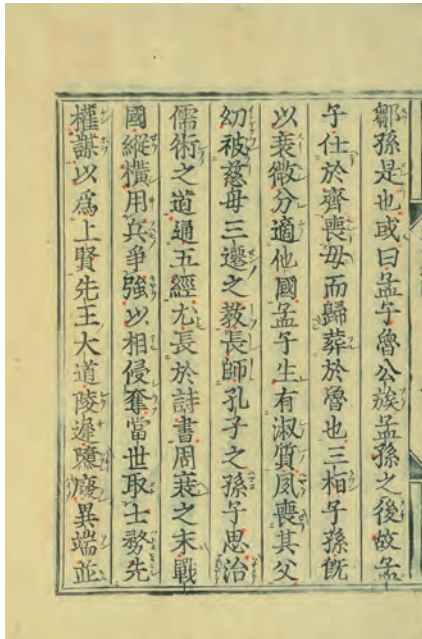
6 論語集解殘本 1 帖 旧鈔本 (恭75)

『論語』は孔子の言行を後に弟子たちが「学而」以下の20篇に編纂したもの。本書は、魏の何晏(?~249)が注釈を加えた集解本。巻5から巻10までを存する。もと卷子本であったものを室町時代ころに折本に改装している。巻尾に「永正十一年(1514)八月修補之」と記した紙片が貼付されていたというが、今は残っていない。書写年代や伝承は不詳であるが、鎌倉時代中期以前に博士家の伝本を書写したものと考えられている。朱書でヲコト点、声点および連続符を施し、墨書で仮名の訓を加え、字傍、行間および欄外に訓義その他を注記している。



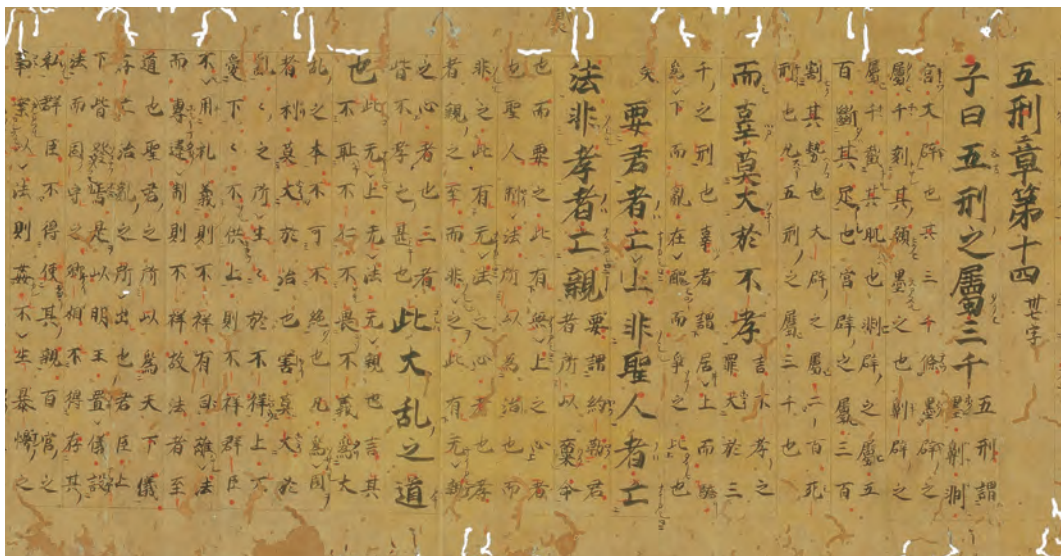
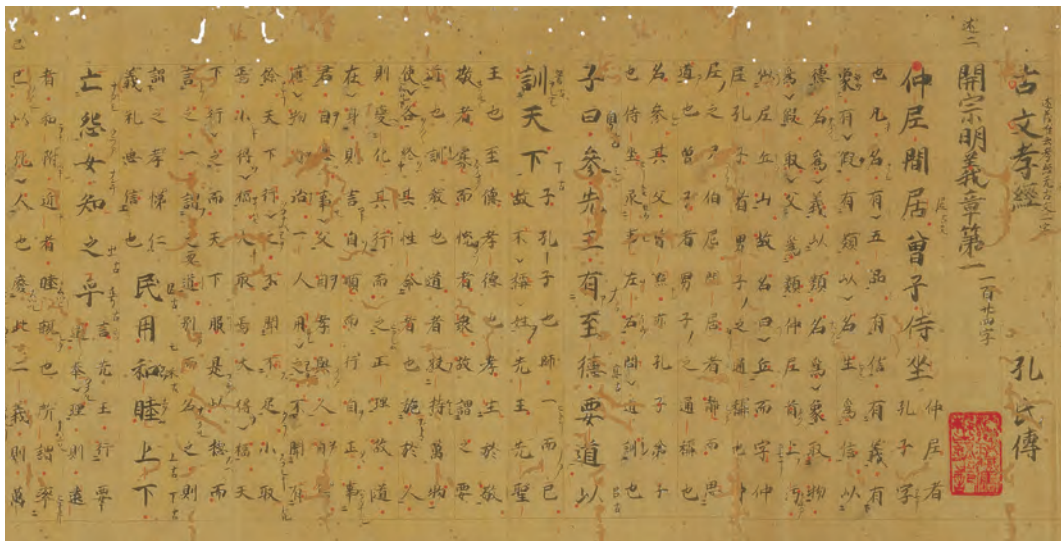
7 孟子 14 卷 5 冊 慶長中刊活字本 (恭48)

『孟子』は孔子の後学孟軻の著で儒家の經典のひとつ。後漢の趙岐(?～201)の注。本書卷末には「関東上総住今関正運刊」の刊記がある。また、「曼珠院蔵」「曼珠院図書之印」「足利学校古本」などの印記がある。今関正運に關しての詳細は不明であるが、同様の刊記を有する活字刊本には『周易』『礼記』『中庸章句』(恭49)などがある。なお、『孟子』の古活字版としては本書をはじめ5種類の伝本が知られている。



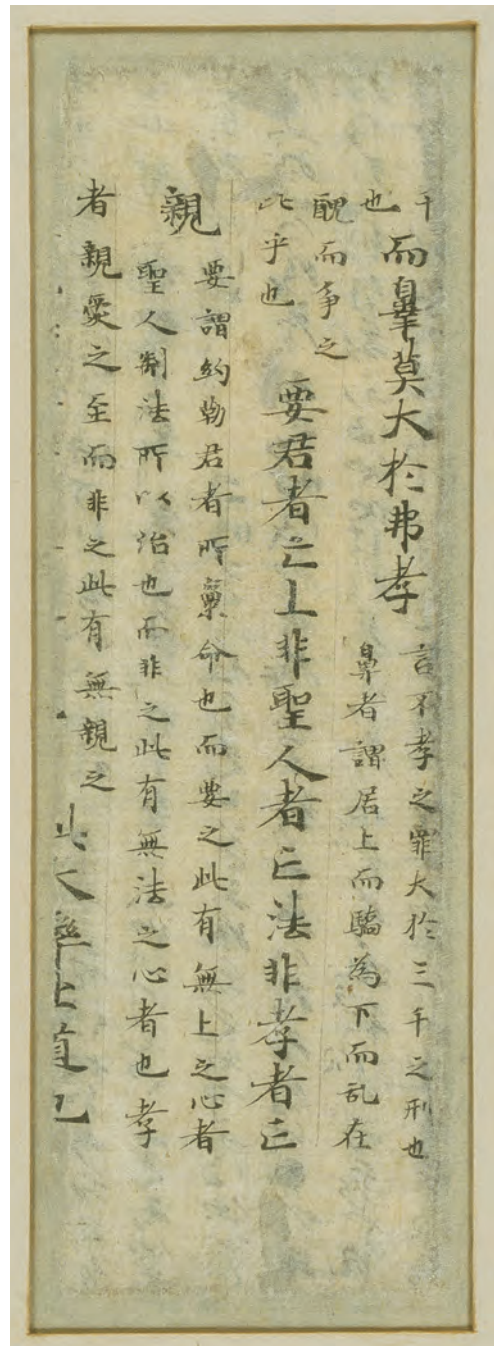
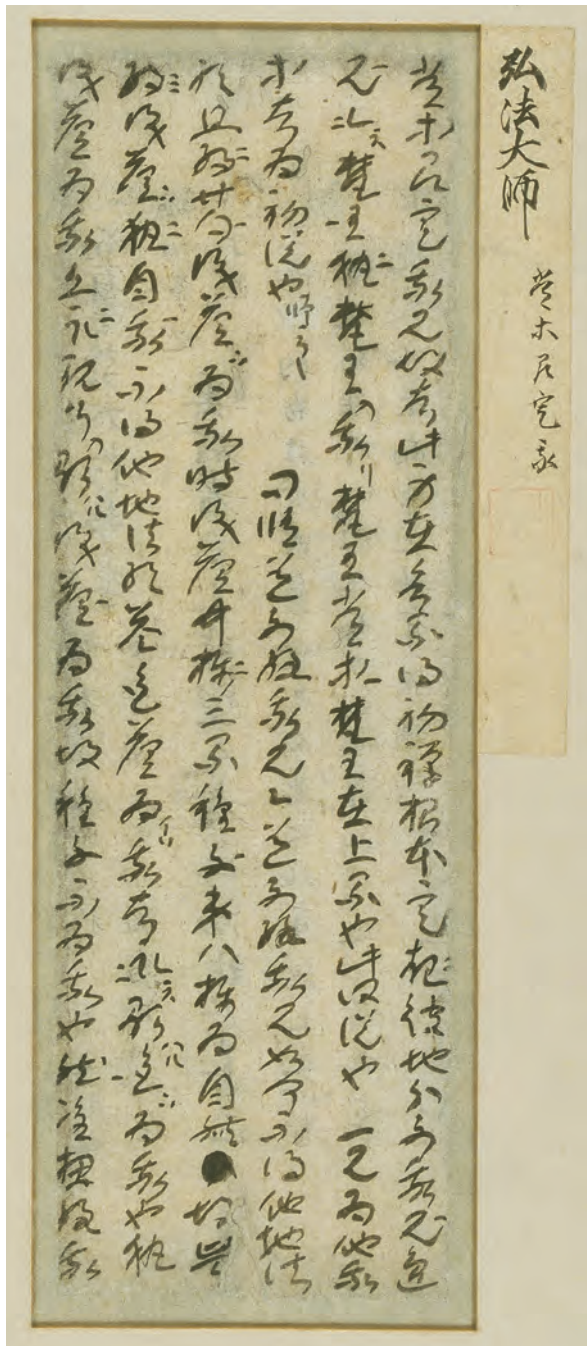
8 古文孝經 1 卷 1 帖 旧鈔本 (恭71) (重要文化財)

『孝經』は儒家の重視する「孝」の徳を説く經典。『古文孝經』は『古文尚書』などと同じく孔子の旧宅から出たという『孝經』に漢の孔安国が伝(注釈)を施したものとされるが、現在は偽書と考えられている。巻尾の奥書によれば、本書は仁治2年(1241)の清原教隆校点本で、本邦現存の『古文孝經』旧鈔本の中では最古のものに属する。もと卷子本であったものを後に折本に改装してある。清原教隆(1199～1265)は鎌倉時代中期の儒学者で、北条実時の師として金沢文庫の創設に影響を与えた人物。



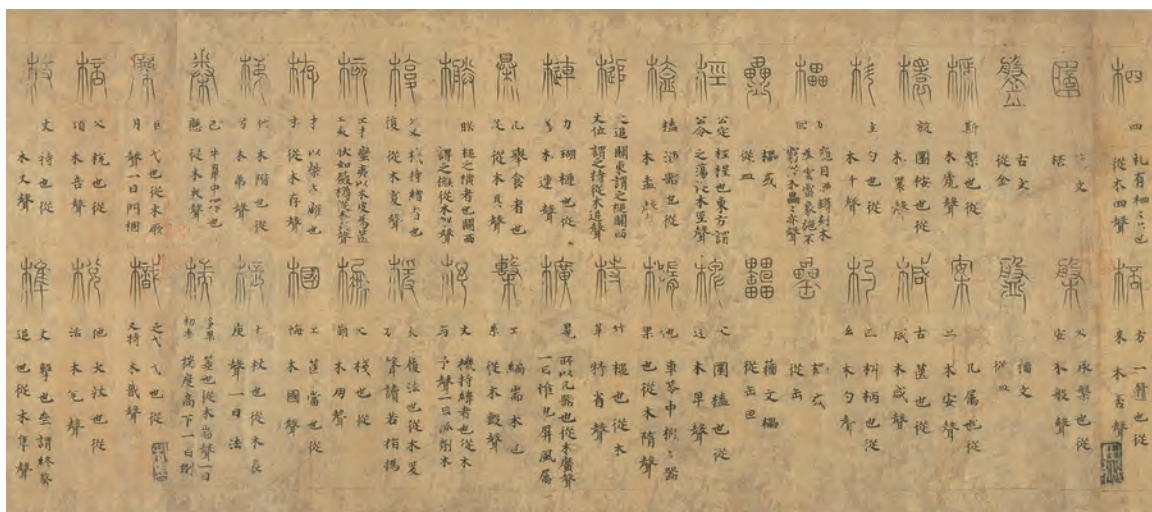
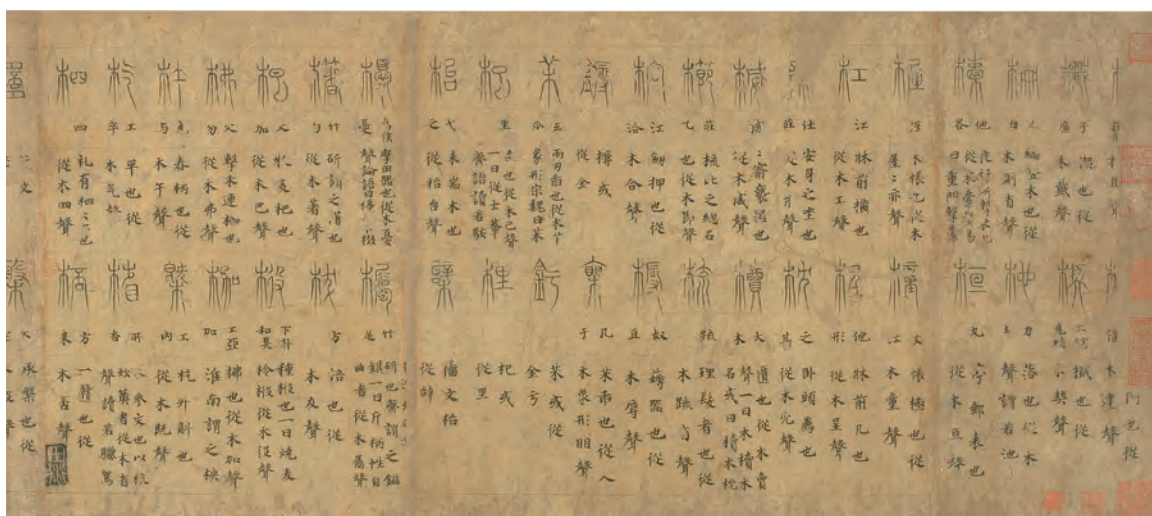
9 古文孝經断簡 旧抄本 (洗41)

『古文孝經』五刑章の断簡。五刑章の經文37字のうち首部を除く残り29字と孔安国の伝に相当する。わずか5行ほどを存するのみであるが、奈良時代の写經生の筆と推定されており、極めて珍重すべきものである。紙背は弘法大師の筆と伝えられる仏典6行分。本断簡は6代武田長兵衛氏が洗心文庫に取り置いてあったもので、後に杏雨書屋に入った。もともとは内藤湖南の旧藏品であったとの説もある。



10 説文解字木部殘卷 1 卷 唐鈔本 (恭67) (国宝)

『説文解字』は後漢の許慎の撰。漢字 9353 字を 540 部に分類して、形・音・義を解説した書。永元 12 年 (100) に完成。略して「説文」という。本書は、その「木」部の 188 字を伝える残巻である。書写年代を明示するものはないが、末尾近くの「互」字の解字「古文桤」の「桤」の末画を欠筆するのは、穆宗 (在位 820~24) の諱である「恆」を避けたと考えられるから、およその書写時代が推定できる。現在の『説文解字』は、全て宋の徐鉉・徐鍇兄弟の校訂本に依拠しているのに、本書は徐本以前の姿を伝える貴重な資料といえる。



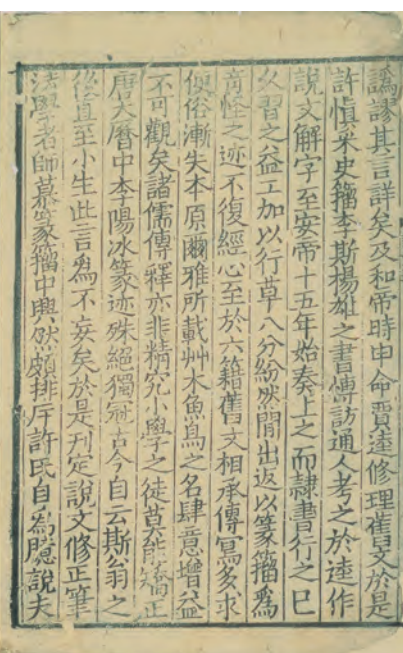
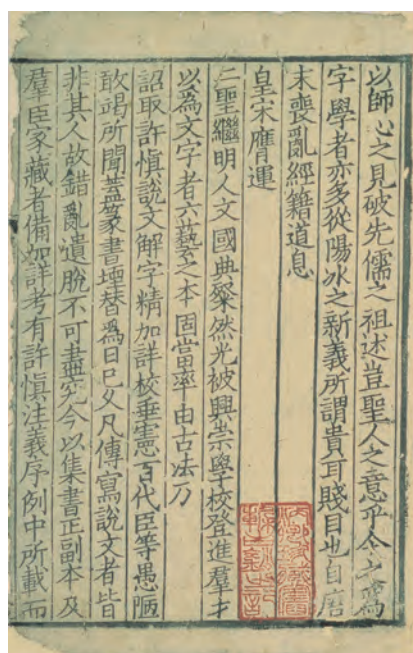
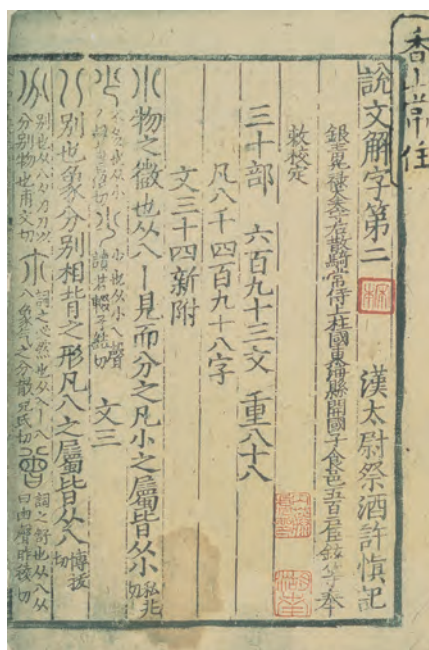
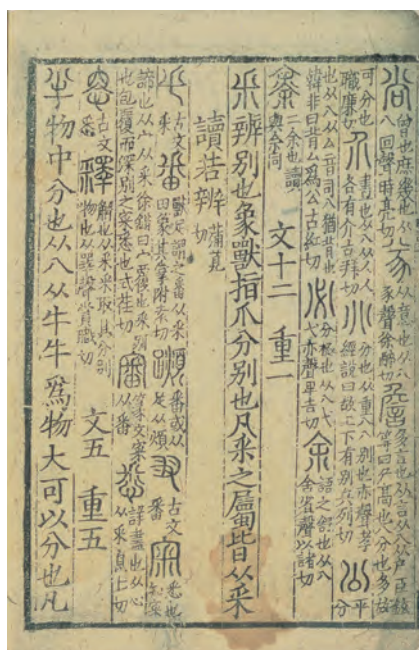
11 説文解字標目残卷 1 卷 敦煌写本 (羽674)

本書は、『説文解字』の標目の残卷である。標目卷第7の末尾2行、卷第8の全部、卷第9の首5行を存する。最初に卷第を1行で示した後、その巻に収載する部首字と部首の通し番号とを列記する。現在の通行本などと比較すると、卷7は通行本の卷6、卷8は同じく卷7、卷9は同じく卷8に相当し、巻内の部首の順序などにも違いが見られる。本書も前の本部残卷同様、徐本以前の姿を伝える貴重な資料のひとつといえよう。「木斎珍藏唐人秘笈」「德化李氏凡将閣珍藏」の印記がある。



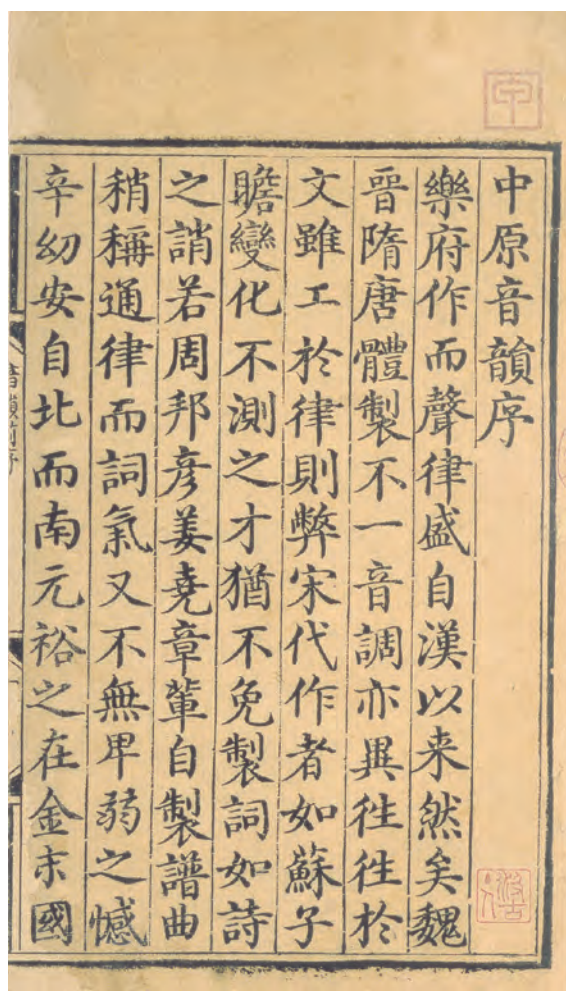
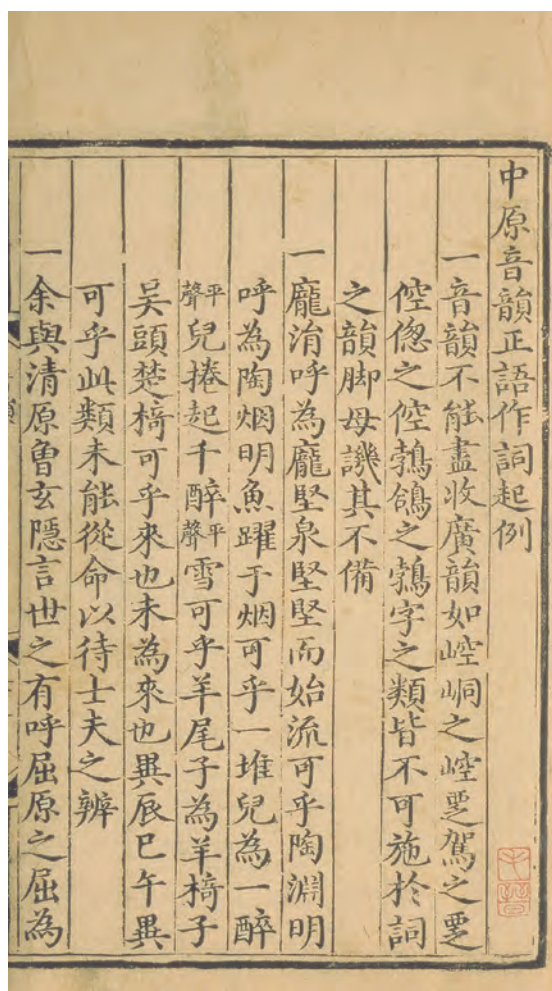
12 説文解字殘本 4冊 北宋刊南宋補刻本 (恭2)

現在の『説文解字』のもととなった徐鉉(916~91)らの校訂本。宋代に版刻されたいわゆる大徐本で、静嘉堂文庫所蔵の北宋刊本と同種のものである。巻2、5、6、13~15を存する。本書は巻15の後半部分を欠くが、静嘉堂文庫本には雍熙3年(986)の徐鉉らの進表および李昉らの牒があり、雍熙中に国子監において雕印させたものであることが知られる。『毛詩正義』(恭1)と同じく「香山常住」の黒印がある。



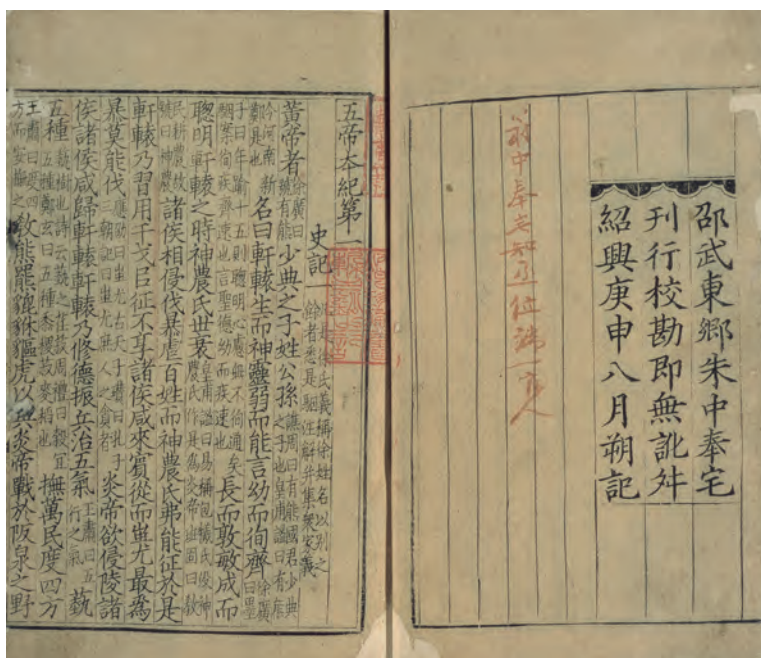
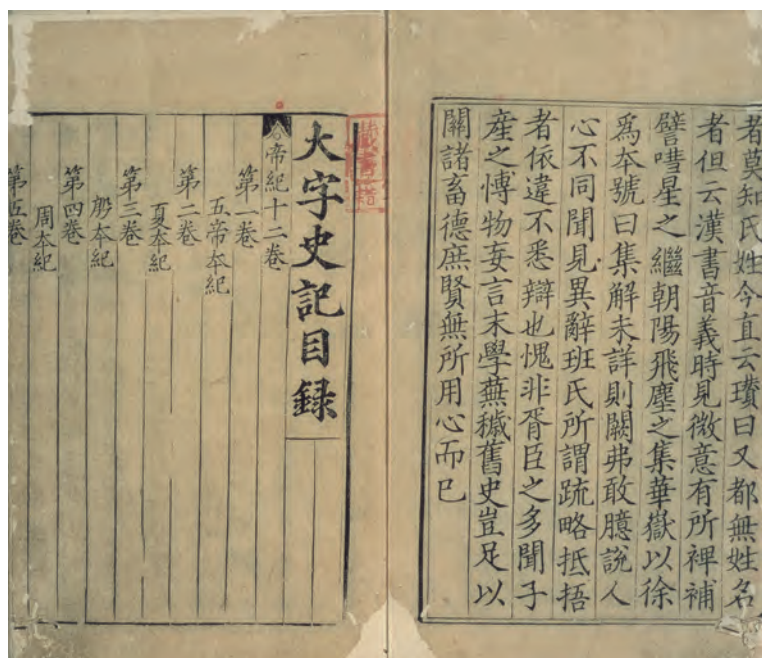
13 中原音韻 不分卷 2 冊 元刊本 (恭17)

『中原音韻』は、当時標準的な韻律の拠る所を示す曲韻書がなかった元曲の押韻の基準を示すことを目的に、周德清(1277～1365)が泰定元年(1324)に撰述した韻書。関漢卿や馬致遠ら代表的な戯曲家の元曲作品に用いられている当時の口語の韻律に基づいて編纂されており、それまでの韻書とは体例や音韻体系の上で大きな相違が見られる。本書の元刊本は極めて数が少なく貴重である。また、明末清初の著名な蔵書家・出版者である毛晋の旧蔵本で、「毛晋」「毛晋之印」「汲古主人」などの印記がある。



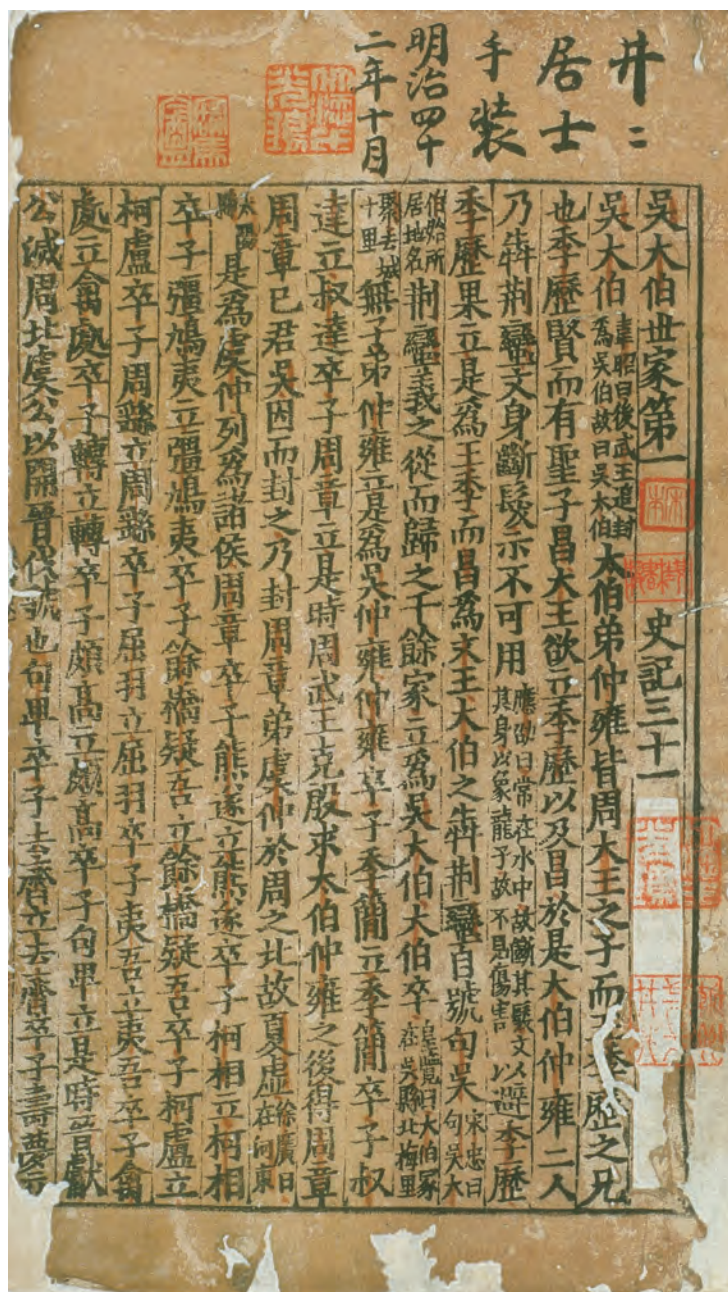
14 史記集解 130 卷 14 冊 南宋刊本 (恭 4)

劉宋の裴駰の集解本。『史記』は漢の司馬遷の手になる古代から漢の武帝期までの通史。紀伝体で書かれており正史の筆頭に位置する。本書は、巻首に裴駰の「大字史記集解序」を置き、次いで「大字史記目録」を配する。目録末尾の裏面には、「邵武東郷朱中奉宅/刊行校勘即無訛舛/紹興庚申八月朔記」との刊記があり、紹興庚申すなわち紹興 10 年 (1140) の邵武 (福建) の朱氏家刻本であることが知られる。一部の巻には朱点や墨書の注記書入れが見られる。また、改装の際に天地が切断されている。毎巻「蘭陵家藏書籍」「蘭陵藏書」の印記があり、飛鳥井家の旧蔵という。



15 史記集解殘本 11 冊 北宋刊本 (恭 3) (国宝)

劉宋の裴駰の集解本。卷 31～39、44～60、81～101、109～130 を存する。校勘ないし刊行に關する記述を欠き、刊行年代は不明である。ただし、『鉄琴銅劍樓藏書目錄』に載せる北宋刊本と行款字数や欠筆などがほぼ同じであり、仁宗朝 (1022～63) 以前の同種の刊本と考えられている。『史記』の北宋刊本は極めて珍しく貴重な書である。なお、11 冊のうち 10 冊は明治の漢学者竹添光鴻 (号は井井) 旧蔵の北宋刊本で、残りの 1 冊 (卷 50～60) は富岡謙蔵 (号は桃華) 旧蔵の南宋刻本で補ってある。



北宋刊本

臣等竊以文官入仕之日。自應先求其學問。而後求其政事。今乃不問學問。而先求其政事。此所謂本末倒置也。夫古之聖人。必先求其學問。然後求其政事。故曰。士有畫地不遷。不可奪志。此其所以為士也。今乃不問學問。而先求其政事。此所謂本末倒置也。

臣等竊以文官入仕之日。自應先求其學問。而後求其政事。今乃不問學問。而先求其政事。此所謂本末倒置也。夫古之聖人。必先求其學問。然後求其政事。故曰。士有畫地不遷。不可奪志。此其所以為士也。今乃不問學問。而先求其政事。此所謂本末倒置也。

臣等竊以文官入仕之日。自應先求其學問。而後求其政事。今乃不問學問。而先求其政事。此所謂本末倒置也。夫古之聖人。必先求其學問。然後求其政事。故曰。士有畫地不遷。不可奪志。此其所以為士也。今乃不問學問。而先求其政事。此所謂本末倒置也。

北宋刊本

史記一百三十

不自率士國紛亂天下無何城其後不許是時禮魯漢宗正乃拜禮爲楚王奉元王宗廟是爲景文王立王立三年卒子安王道立安王二十二年卒子襄王經立襄王十四年卒子王純代立王純立地節二十二年中人上書告楚王謀反王自殺國除入漢爲彭越王徐毋王定王立七年卒彭越王彭王定王立七年卒以夏死故爲幽高后王呂祿代趙一歲而高后崩大臣誅諸呂呂祿等乃立幽王子遂爲趙王孝文帝即位二年立遂弟辟彊取趙之河間郡爲河間王以爲文王立十三年卒子哀王福立一年卒無子絕後國除入于漢遂旣王趙二十六年孝景帝時坐呂亂錯以適別趙王常山之郡吳楚反趙王遂與合謀起兵其相建德內史王惲諫不聽遂燒殺建德王惲發兵屯其西界欲待吳與俱西北使匈奴與連和攻懷德使曲周侯厭尋轡之趙王遂還城守邯鄲相距七十里吳楚敗於吳不能西匈奴聞之亦止不肯入漢邊塞布自破虜還乃并兵司水灌趙城趙王自殺邯鄲遂降趙幽王絕後

南宋刊本（富岡謙蔵旧蔵）

楚元王世表第二十

史記五十
韓彭劉黥王關張

楚元王劉交者高祖之同母弟也。父少弟也，字隋，高祖兄第四人長兄伯柏蚤卒。始高祖微時，嘗辟事時時與賓客過巨嫂金中尚嫂厭叔叔與客來，嫂詐爲憂，謂機金實客以故去已而視釜中尚有羹焉。祖由此怨其嫂及高祖爲帝，封昆弟而伯子獨不得封。太上皇以爲言，高祖曰：「其非妾封之也，爲其毋不長者耳。」於是乃封其子信爲魯元侯。魯惠公後以昭烈七年封十三而王次兄仲於代。封其女卬爲燕王。齊襄王元年有弟則爵。高祖六年己巳，初封楚王韓信，以陳乃弟交立王都彭越城，卽位二十三年卒。子夷王郢三、夷王四年卒。子戊立，王戊立二十一年冬坐爲薄太后服私姦劫東海郡奏伐與吳王成謀反，其相張敖太傅趙主諫不聽。戊則殺尚夷吾起兵與吳西攻梁破棘壁至昌邑南，與陳將周亞大戰，陳敗矣。楚糧道士卒餓矣，王走楚王戊自殺軍遂降。降漢已平矣。楚孝惠嘗欲以樞侯子嬰吳楚懷王弟王，王曰：「不可。」以元王子禮爲楚王。呂太后召吳王入朝，召宗室順善。今

16 漢書卷 81 殘卷 1 卷 敦煌写本 (羽432)

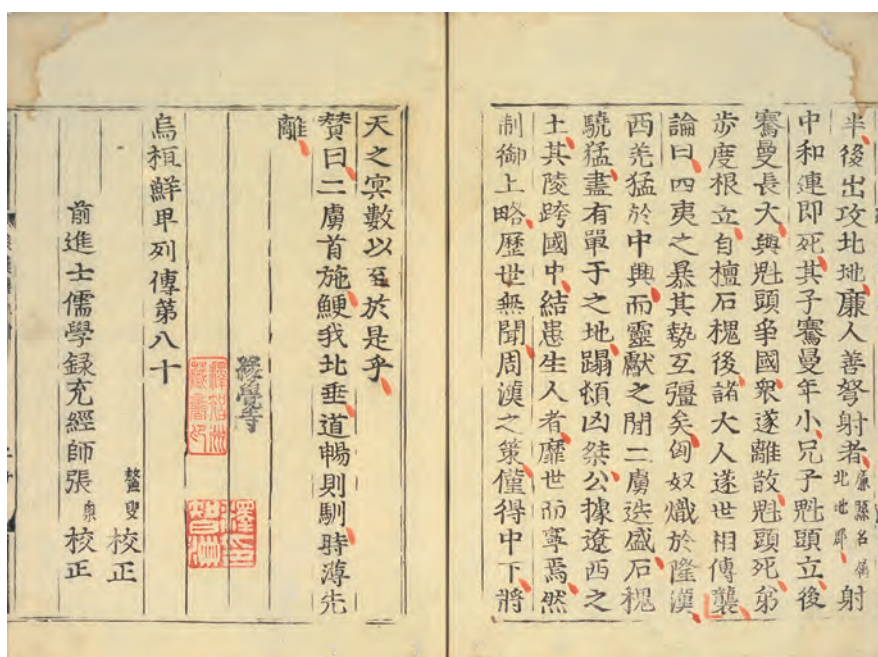
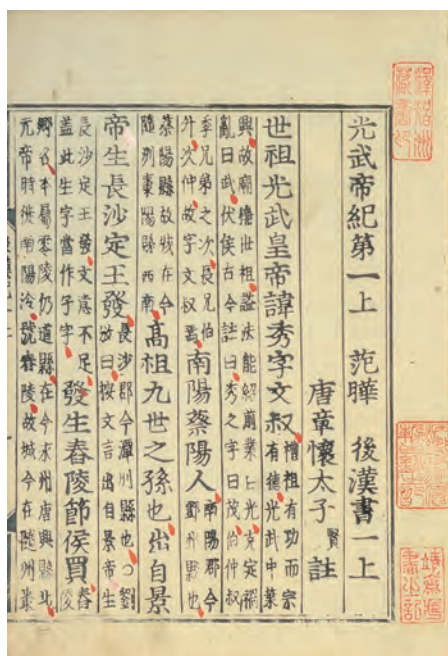
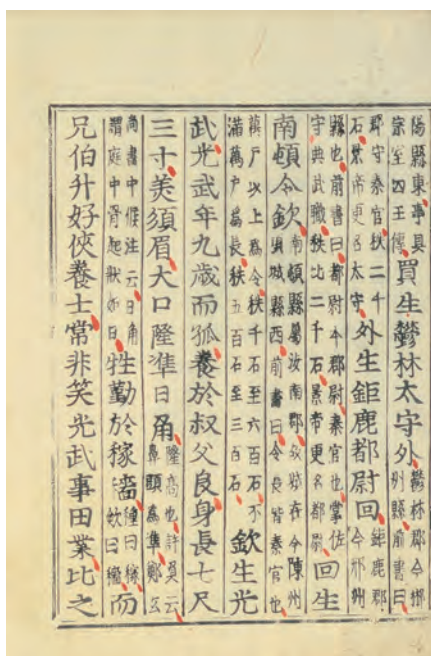
漢の班固 (32~92) の撰。『史記』は古代から前漢武帝期までの紀伝体で書かれた通史であったが、『漢書』は前漢王朝一代の断代史である。以後の正史の模範となった。『史記』と同じく紀伝体で書かれ、本紀、表、志、列伝で構成される。本書は、卷 81 匡張孔馬伝の残巻で、首尾を欠く。唐の顔師古注本以前のテキスト。黄染の麻紙に楷書で書かれており、全 9 紙を存する。「敦煌石室秘笈」「李盛鐸印」「木斎蔵書」「李滂」の印記がある。

間日蝕世餘地震五十六或為諸侯相然或
彗狀侵中國灾變之意深遠難見故聖人
罕言命不語怪神性與天道自子貢之屬
不得聞何況淺見鄙儒之所言陛下宜備
政事以善應之興下同其福喜此經義意也
新學小生亂道誤人宜無信用以經術斷之
上雅信愛禹猶此不疑王氏後曲陽侯根及
諸王子弟聞知禹言皆喜悅遂親就禹見
時有慶異若上體不安常擇日梁齋露
著蓋蓋易著於夏宮下
明日乃用言傳天意正衣冠立筮得吉卦則獻
其占如有不吉禹為感動有憂色成帝嘗
禹及事哀帝建平二年薨諡曰節侯禹
四子長子宏嗣侯官至太常列於九卿三
弟皆為校尉散騎諸曹初禹為師上難
數對已問經為論語章句獻之始魯扶卿及
夏侯勝王陽蕭望之輩玄成皆說論語篇
第或異禹先事王陽後從庸生採獲所安眾
後出而尊貴諸儒為之語曰欲不為論念張
文猶是學者多從張氏餘家歸微
孔光字子夏孔子十四世之孫也孔子生伯
魚鯉之子思伋之子子上帛之子子家求

魚鯉之子思伋之子子上帛之子子家求
生子真其之子子高穿之子順子為魏相順
生鮒子為陳涉博士死陳下鮒弟子襄為
孝惠悼士長沙太傅襄生忠生武及安國
武生延年子生霸字次孺霸生光為安國
延年皆以治尚書為武帝博士安國至臨
淮太守霸之治尚書事太傅夏侯勝昭帝
末年為博士宣帝時為太中大夫以選授
皇太子經遷詹事高密相是時諸侯王
相在郡守上元帝即位徵霸以師賜爵
關內侯食邑八百戶號褒成君給事中
加賜黃金二百斤第一區從名數子長安
眼或曰從籍也素
名人名數口數
稱爵位泰過何德以堪之上欲致霸相位
自御史大夫貢禹卒及薛廣德免輒欲拜
霸讓位自陳至三日上深知其至誠乃弗
用以是敬之賞賜甚厚及霸薨上素服
臨弔者垂至賜東園祕器錢帛英贈以
列侯禮諡曰烈君霸四子長子福嗣爵關
內侯次子捷子弟喜皆列侯尉諸曹光

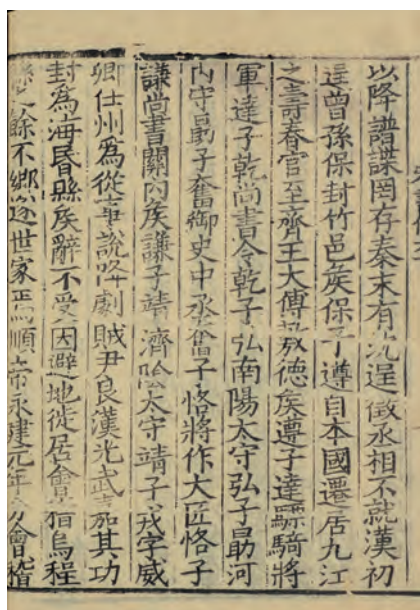
17 後漢書 90 卷 目錄 1 卷 統漢志 30 卷 全 34 冊 寛永活字本 (恭60)

『後漢書』は劉宋の范曄撰、唐の章懷太子李賢注。『統漢志』は晋の司馬彪撰、梁の劉昭注。『後漢書』は『漢書』に続く後漢一代の歴史書。本紀 10 卷、列伝 80 卷からなり、志は『統漢志』を当てる。寛永 5 年 (1628) 刊の同種活字本『漢書』に続いて出版されたものとみられる。全巻にわたって朱書の句読点を施す。栗皮色表紙を存する原裝本で保存状態は良い。各巻に「釈智洲蔵書印」「靖斎蔵書之記」「釈智洲」の朱印および「縁覚寺」の黒印がある。

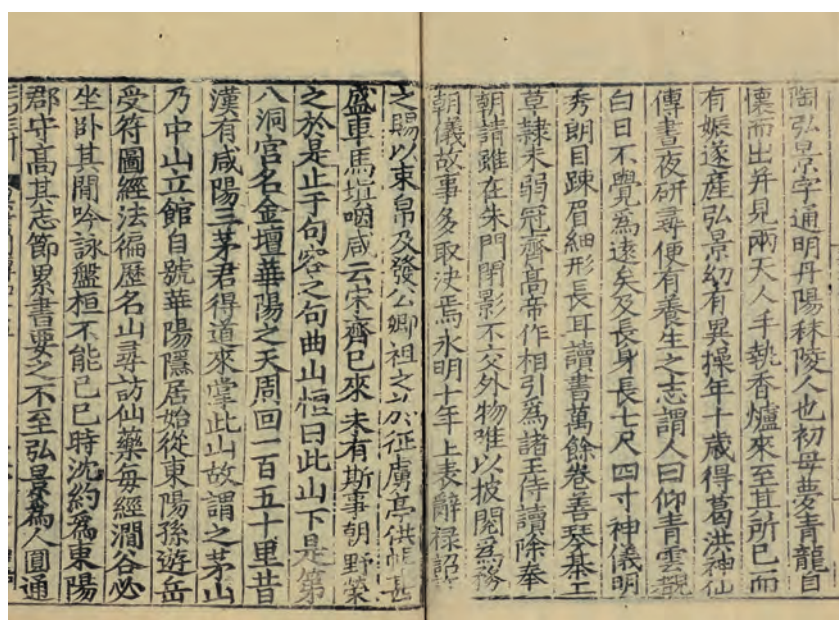
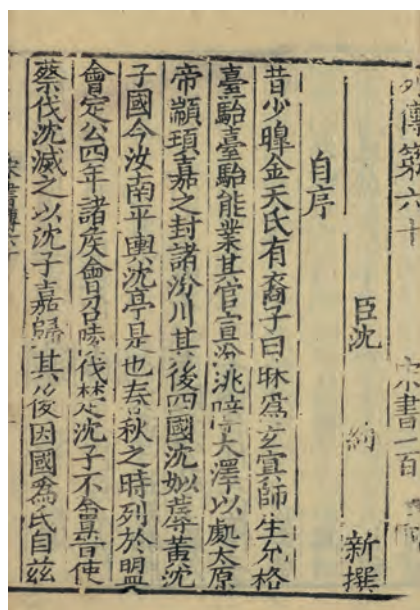


18 眉山版七史 139 冊 宋紹興間刻元明遞修本 (恭 5)

『郡齋讀書志』の伝えるところによれば、本書は紹興 14 年 (1144) に四川の転運使となった井憲孟が諸州の学官に依頼して収集した宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書の七史の諸本をもとに、眉山県 (四川) で刊行させたものである。一般に蜀大字本と呼ばれている。元の時に版木の磨滅損耗を修補し、明の洪武年間 (1368~1398) には版木を南京の国子監に移して補修刊行を続けたので、南監本とも称される。清の嘉慶中 (1796~1820) に火災によって版木は失なわれた。



宋書卷100



梁書卷51

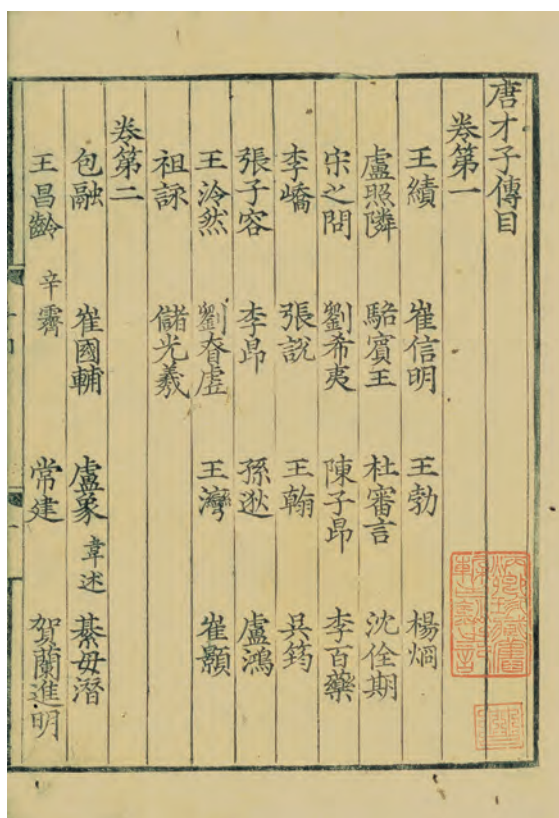
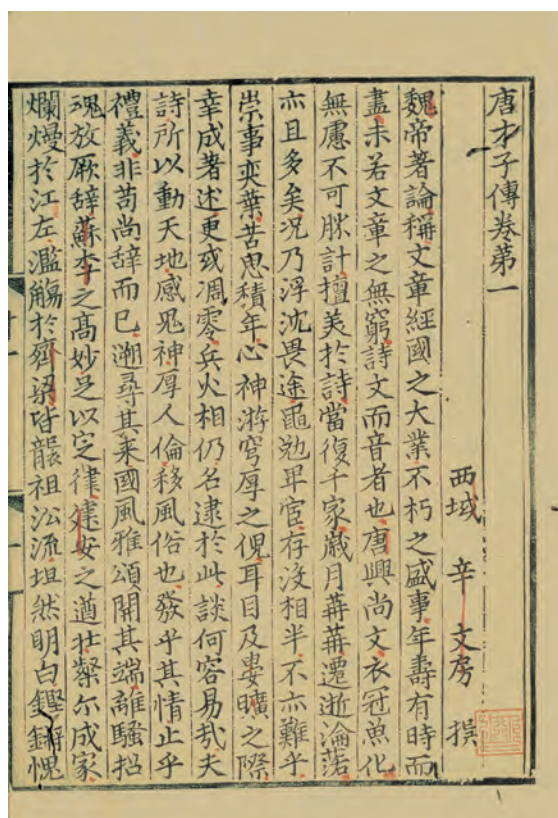
19 歴代君臣図像 1帖 元刻拓本 (恭12)

本書は、南岳の僧懶牛懃が漢以来宋に至る帝王および名臣の図像 74 図を集めたものを、廬山の開先寺で石に彫ったものの拓本である。末尾に泰定 4 年 (1327) の汪從善の跋ならびに至元 4 年 (1338) の王弼の叙がある。折本で毎頁ごとに一人を刻している。展示部分は、蜀の劉備、魏の曹操、呉の孫権、諸葛孔明および王羲之と謝靈運である。



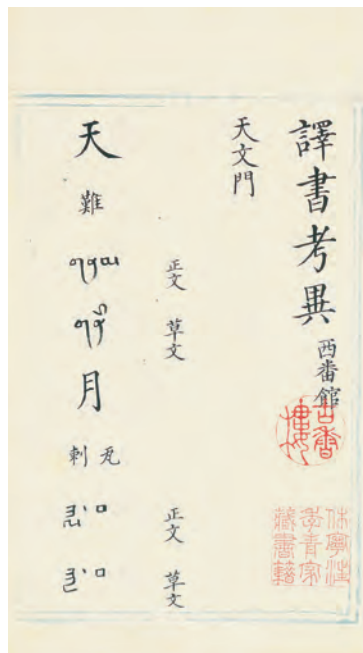
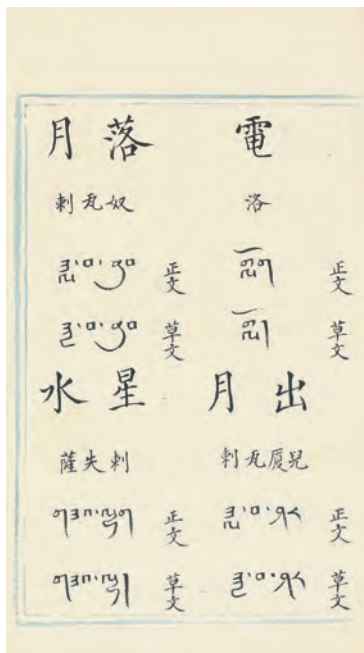
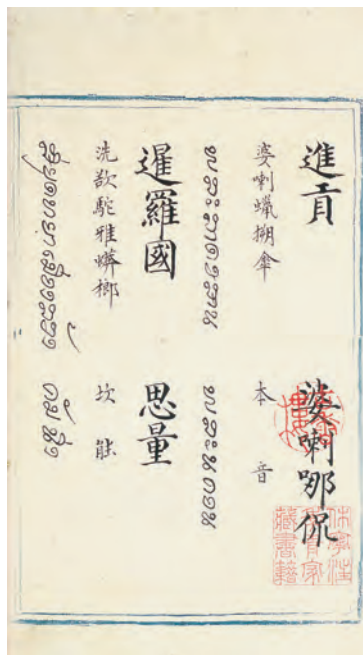
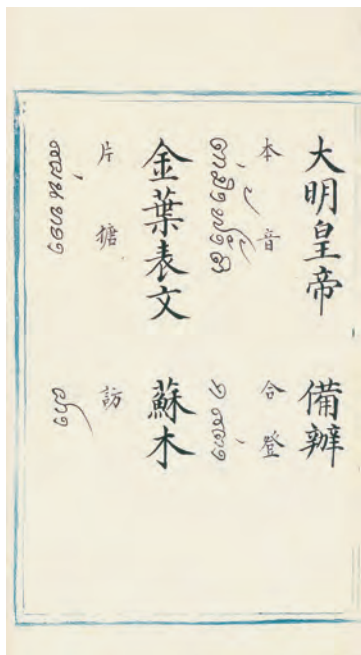
20 唐才子伝 10 卷 2 冊 室町初期刊本 (恭22)

本書は、唐代の詩人 278 人の伝記と関連する 120 人の記事を集めたものである。撰者の辛文房は西域の人。元の大徳 8 年 (1304) の自序を有する。『経籍訪古志』所載の狩谷極斎の蔵本には「文安己巳六月十八日朱点終」の識語があったと伝えられることから、文安 6 年 (1449) 以前の刻本であることが知られる。本書は中国では早くに散佚して伝わらず、林述斎は『佚存叢書』に収載した。その後、清の鮑廷博が『知不足齋叢書』に収めてから広く知られるようになったものである。なお、帙の内面には内藤湖南が本書入手の経緯を記した識語が残されている。



21 華夷訳語 不分巻 10冊 明鈔本 (恭96)

『華夷訳語』は、明代に中国と交渉を持った近隣諸国の言葉を集めたもので、中国語との対訳語彙集である。甲・乙・丙・丁の4種に大別される。本書は乙種本に属し、成祖の永楽5年(1407)に外交文書の翻訳を担当する四夷館において、館員の学習上の必要から編纂されたもので、韃靼・女真・西番・西天・回回・百夷・高昌・緬甸などの諸語を対象とし、来文と称する例文が添えられている。内藤湖南が大正6年(1917)上海の書肆樂善堂から購入したもの。



22 老子道德經殘卷 1 卷 敦煌写本 (羽458)

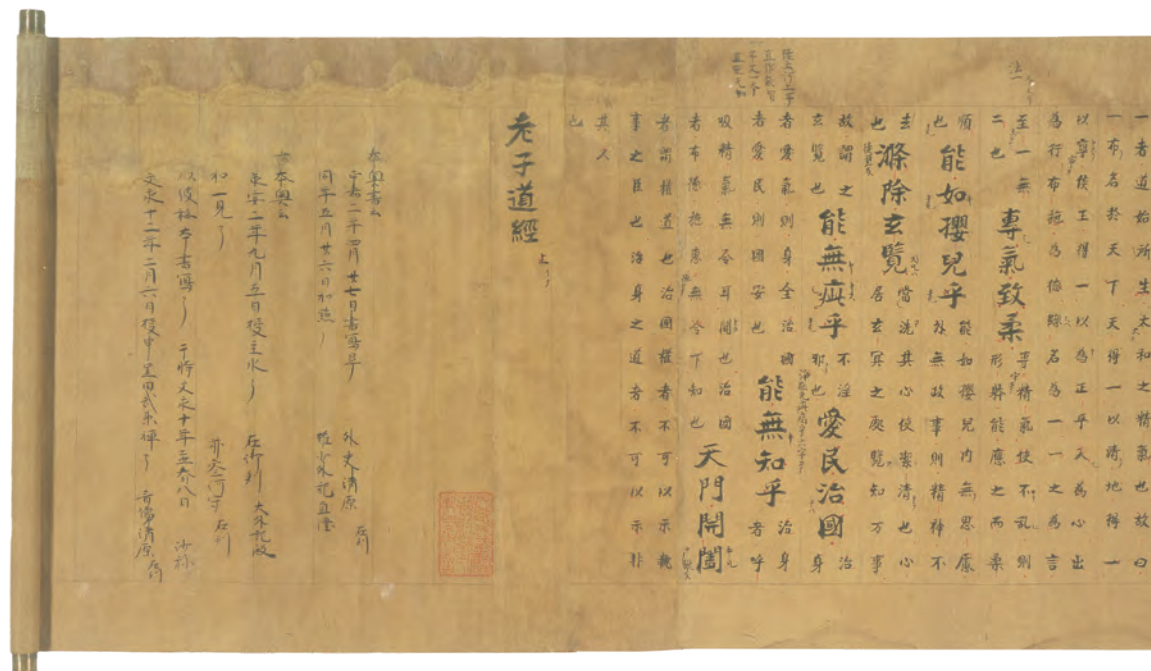
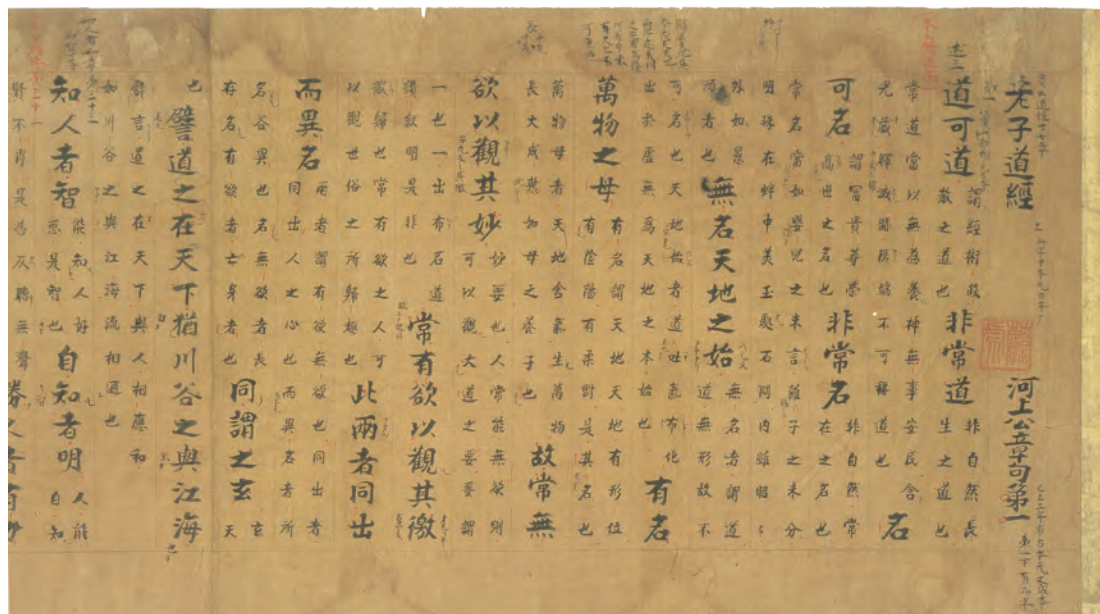
『老子道德經』は道經 37 章、徳經 44 章の全 81 章からなる道家の代表的テキスト。本書は巻首を欠き、道經第 8 章以下を存する。全 14 紙。黄染の麻紙に楷書で書写されているが、第 11 紙以下は紙質が異なる。第 6 紙に中題「老子徳經下」がある。経文のみの無注本。

執大象天下往往而不害安平太樂與銅
過客止道出言淡无味視不足見聽不足聞
用不可既
將欲翕之必固張之將欲弱之必固強之將
欲廢之必固興之將欲奪之必固與之是謂
微明柔弱勝剛強魚不可脫於淵國有利器
不可以示人
道常無為而无不為王侯若能守萬物將自
化化而欲作各將鎮之以元名之樸元名之
樸亦將不欲不欲以靜天下自正
老子徳經下
上德不徳是以有徳下徳不失徳是以元徳
上徳无為而无以為下徳為之而有以為上
仁為之而无以為上義為之而有以為上禮
為之而莫之應則攘解而仍之故失道而後
徳失徳而後仁失仁而後義失義而後禮失
禮者忠信之薄而亂之首前識者道之華而
愚之始是以大丈夫處其厚不震其薄居其
實不居華故去彼取此
昔之得一者天得一以清地得一以寧神得
一以靈谷得一以盈萬物得一以生侯王得
一以為天下政其致之天无以清將恐裂地
无以寧將恐發神无以靈將恐歇谷无以盈
恐竭萬物无以生將恐滅侯王无以貴將恐
廢故貴以賤為本高以下為基是以王侯
自謂孤寡不聲此其以賤為本耶非故致數
譽元舉不欲祿祿如玉落階如石
及者道之動弱者道之用天地之物主於
有有主於无
上士聞道勤能行之中士聞道若存若亡

人之生柔弱其死堅強萬物草木之生柔
脆其死枯槁故堅強者死之徒柔弱者生
之徒是以兵強則不勝木強則共故堅強居
下柔弱處上
天之道其由張弓高者抑之下者舉之有餘
者損之不足者與之天之道損有餘補不足
人道則不然損不足奉有餘數能有餘以奉
又下唯有道者是以聖人為而不恃成功不
處其不欲亦賢
天下柔弱莫過於水而攻堅強者莫之能先
其无以易之故柔勝剛弱勝強天下莫不知
莫能行是以聖人言受國之垢是謂社稷主
受國不祥是謂天王正言若反
和大怨必有餘怨安可以為善是以聖人執
左契不責於人故有徳司界无徳司徹天道
无親常與善人
小國宜民使有什伯之器而不用使民重死
而不遠徙有舟輦无所乘之有甲兵无所陳
之使民復結繩而用之甘其食美其服安其
處樂其俗隣國相望雞狗之聲相聞使民
至老死不相往來
信言不美美言不信知者不博博者不知善
者不辯辯者不善聖人无積既以為人已
愈有既以與人己愈多天之道利而不害聖
人之道為而不爭
老子道德經

23 老子道德經殘卷 1 卷 旧鈔本 (恭78)

『老子』の古い注釈には河上公注と魏の王弼注とがある。本書は、河上公注本の残巻で、道經37章のうち9章を存し、そのうちにも一部欠落や錯簡が見られる。「大燈国師(老子道經/墨斎禅師外題)」との古筆琴山の極札を存し、題簽にも「大燈国師」とあるが、大徳寺開山の大灯国師宗峰妙超(1282~1337)の筆になるかは定かではない。巻末に原本の奥書と校勘に使用した「古本」の奥書とが本文とは別筆で移記されており、それによれば正嘉2年(1258)の清原氏書写本を抄写したことが知られる。



24 莊子讓王篇殘卷 1 卷 敦煌写本 (羽019R)

『莊子』は、内篇7篇、外篇15篇、雜篇11篇からなる『老子』と並ぶ道家の代表的テキスト。本書は、雜篇・讓王篇の殘卷で、首尾ともに欠く。全2紙。黄染の麻紙に楷書で書かれている。本文のみの無注本。書写年代は不明であるが、1箇所「民」字を欠筆していることから、貞觀年間(627~49)ころの書写か。「敦煌石室秘笈」「李盛鐸印」「木斎審定」「李滂」の印記がある。

曰山月
而遺使者罪不若
求之則不得已故若顏
曰道之真以持身其緒餘以
以治天下由此觀之帝王之功聖人之
也非所以完身養生也今之君子多危身
生以徇物豈不悲哉凡聖人之動作也必察
其所以之與其所以為今且有人於此以隨
侯之珠彈千仞之雀世必笑之是何也則其
所用者重而所要者輕也夫生也豈特隨侯

所用者重而所要者輕也夫生也豈特隨侯
之重也哉大目連神通記
子列子窮容貌有飢色容有言之鄭子陽
者曰列禦寇蓋有道之士也居君之國而窮
君无乃為不好士乎鄭子陽即命官遺之粟
子列子見使者再拜而饗使者去子列子入
其妻望之而柑心曰妾聞為有道者之妻子
皆得佚樂今有飢色君過而遺先生食先生
不受豈不命也哉子列子笑謂之曰君非自
知我也以人之言而遺我粟至其罪我也又
且以人之言此吾所以不受也其率臣果作
難殺子陽
楚昭王失國屠羊說走而從於王昭王反國
將賞從者及屠羊說屠羊說曰大王失國說
失屠羊大王反國說亦反屠羊臣之爵祿已
復矣又何賞之有王曰強之屠羊說曰大王
失國非臣之罪也故不伏其誅大王反國非
臣之功故不敢當其賞王曰見之屠羊說曰
楚國之法必重賞大功而后得見今臣之知
不足以及存國而勇不足以死君吳軍入郢說
畏難而避寇非故隨大王也今大王欲廢法
毀約而見說此非臣所以聞於天下者也王
謂司馬子綦曰屠羊說居處卑賤而陳義
甚高子其為我延之以三旌之位屠羊說

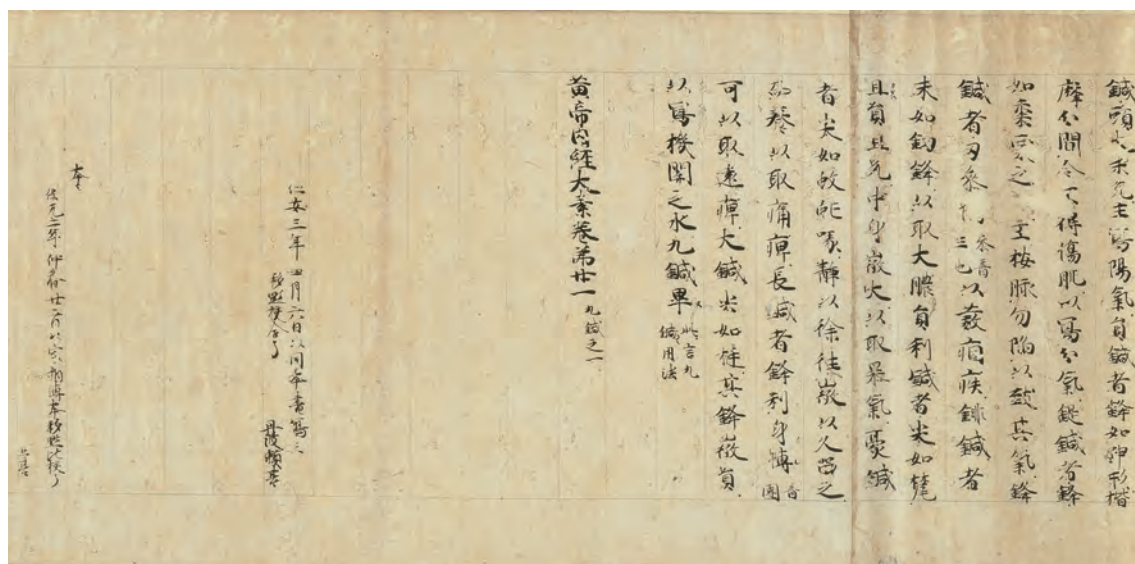
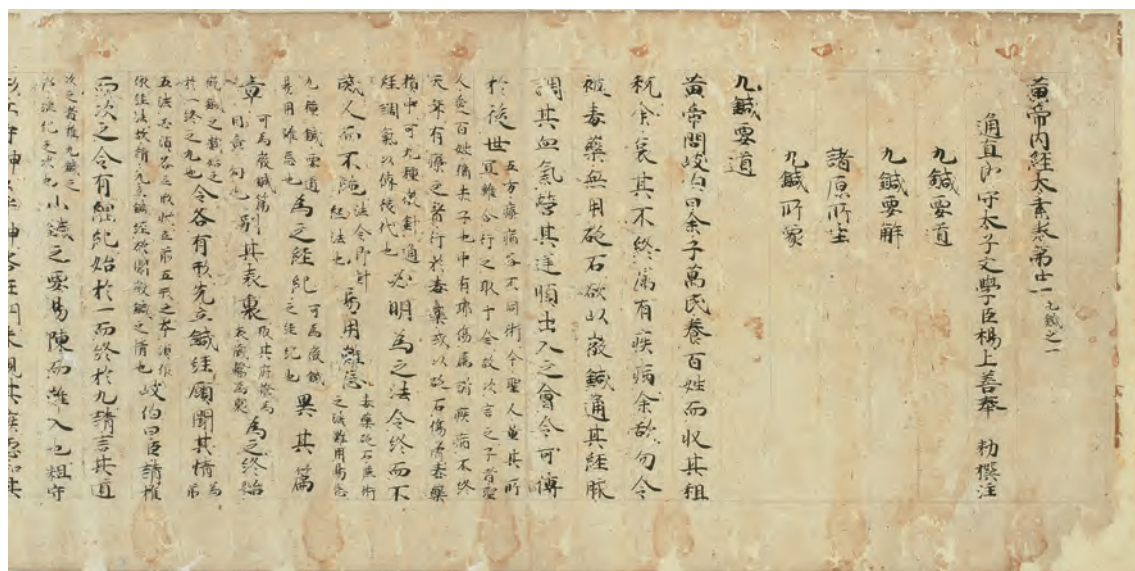
25 六韜 6巻1冊 旧鈔本 (恭82)

『六韜』は中国古代の兵法書。『莊子』にその名が見えるが、現行本は周の太公望呂尚に仮託された偽書である。同じく太公望の書とされる『三略』とともに、古来兵法書の代表とされる。文韜・武韜・竜韜・虎韜・豹韜・犬韜の6巻60篇からなる。本書は、全巻一筆で書かれ、書写や校訂などに関する記述はない。室町時代中期の鈔本と考えられている。本文書写と同時代の朱点および付訓がある。「霊源院」の朱印と「北柳生森氏所持」の黒印があり、巻端には内藤湖南の識語もある。



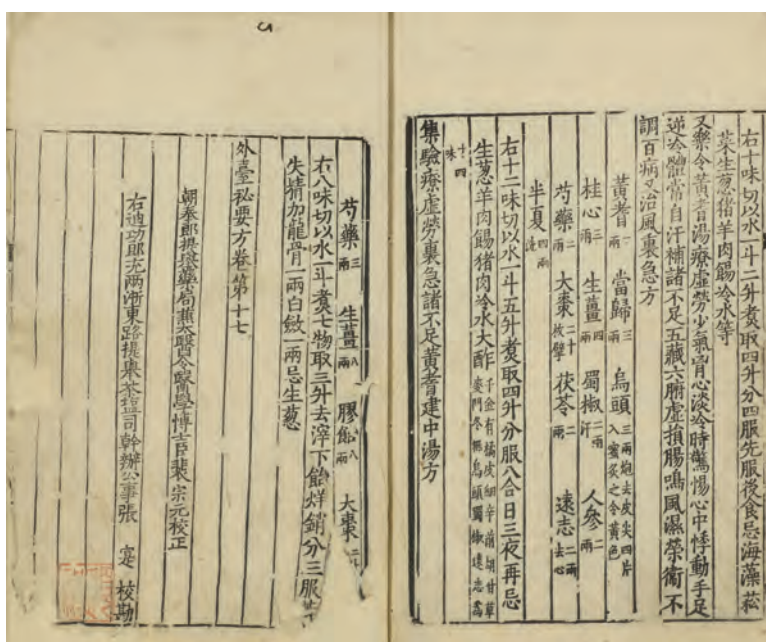
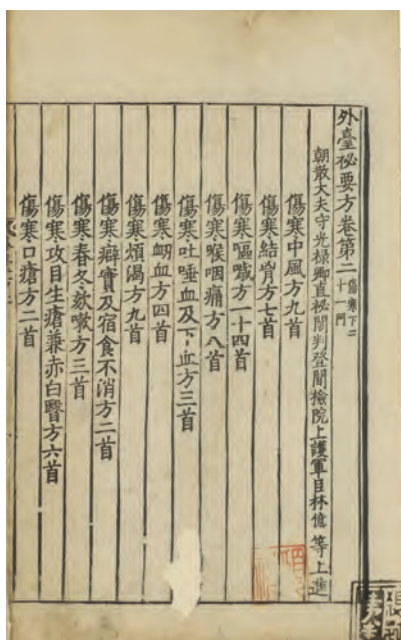
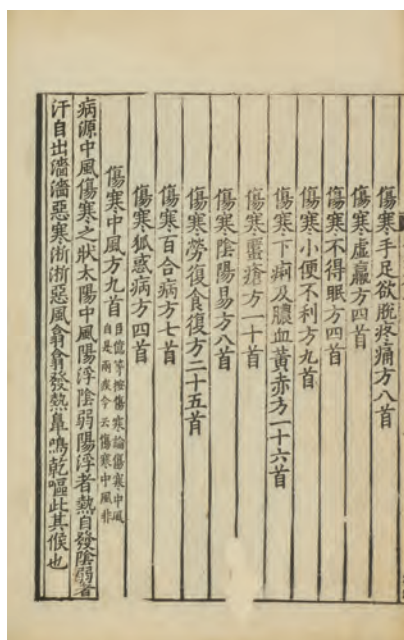
26 黄帝内経太素 存2巻 旧鈔本 (貴7) (重要文化財)

『黄帝内経太素』全30巻は、唐の高宗朝(649～83)の人である楊上善が『素問』『靈樞』の文章を類別して再編集し、注釈を加えたものである。中国では南宋時代に亡佚してしまったが、日本では丹波頼基(丹波康頼の8代の孫)が仁安2年(1167)に抄写し、京都仁和寺に秘蔵されていたものが、江戸時代の文政年間(1818～30)になって25巻分が発見され、その一部が市中に流出した。本書は、そのうちの巻21と巻27で、京都の名医福井崇蘭館の旧蔵本である。



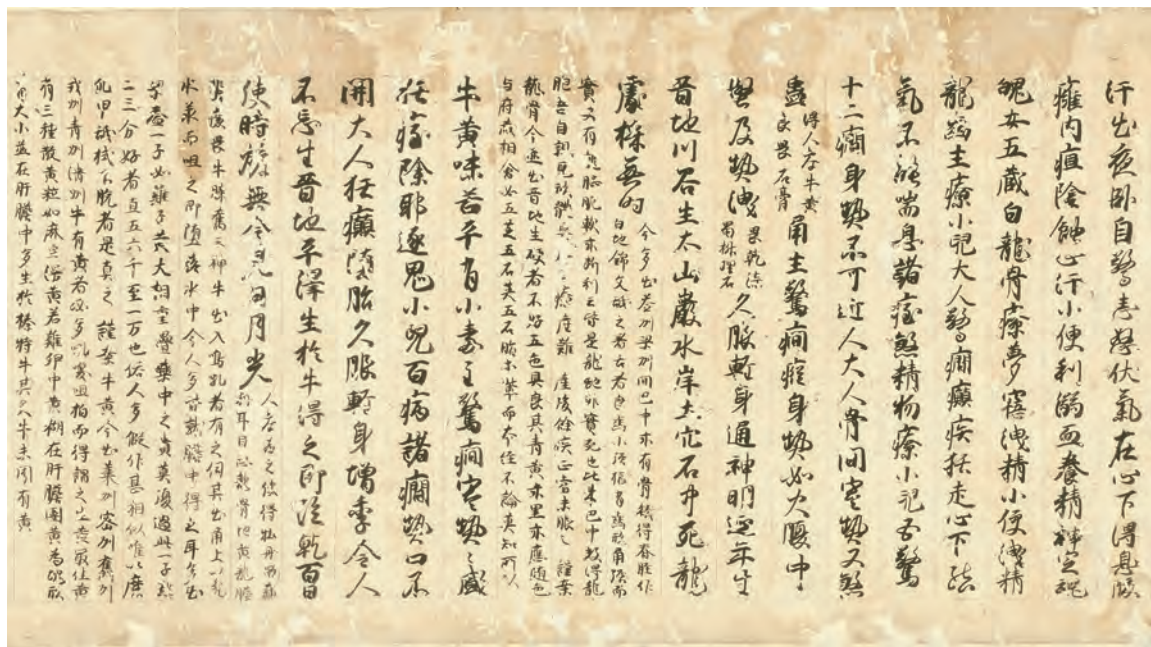
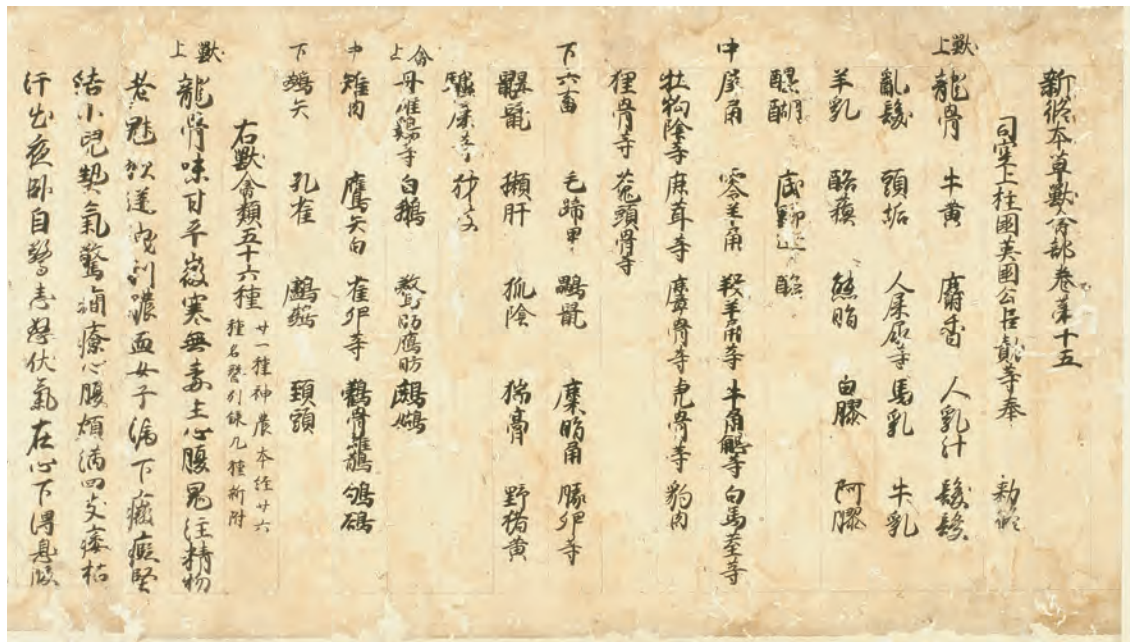
27 外台秘要方 10 卷 10 冊 南宋刊本 (貴 6)

『外台秘要方』全 40 卷は、王燾が唐以前の数多くの医書の要を採って編纂し、天宝 11 載 (752) に完成したもの。北宋の熙寧 2 年 (1069) に初めて校正医書局より刊行された。本書は、北宋刊本に由来する南宋紹興年間 (1131~62) の浙江刊本で、巻 2~3、7、12、16~17、19、32、35、40 を存する。『経籍訪古志』著録の萩野元凱家蔵本。福井崇蘭館の蔵を経て杏雨書屋に入った。宋人のものと思われる「頤神」の印記がある。



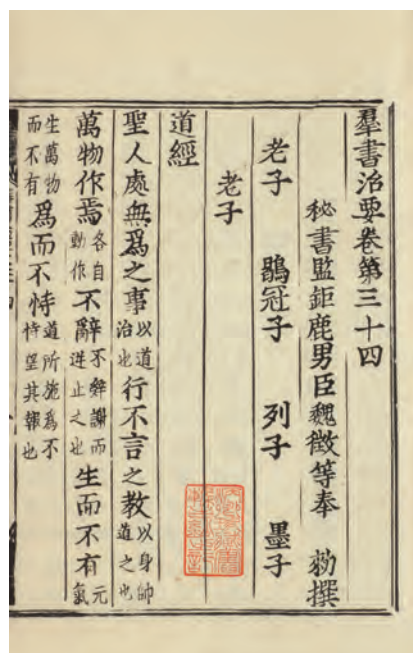
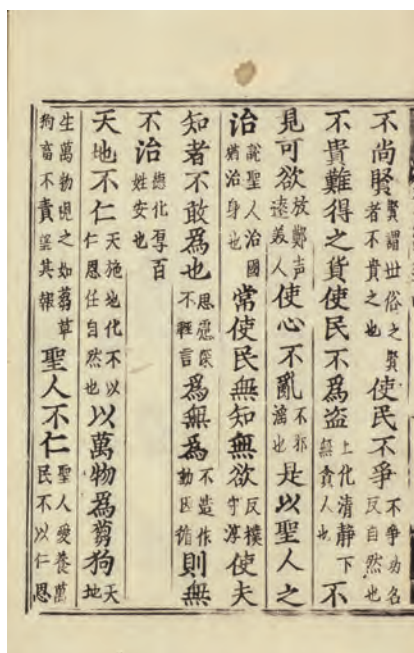
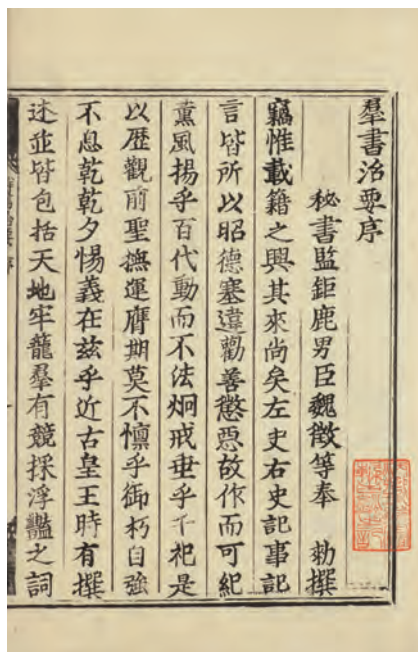
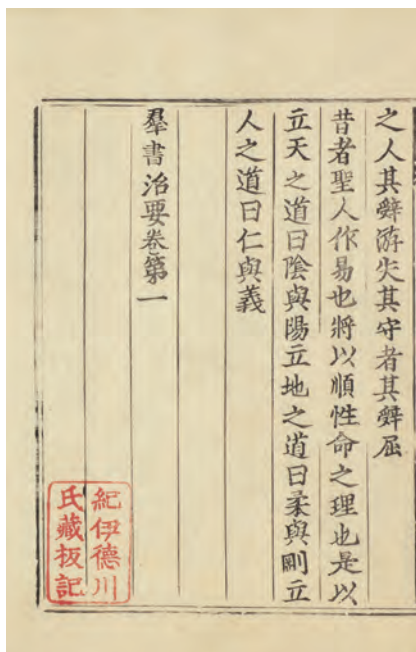
28 新修本草 1 卷 旧鈔本 (貴8) (重要文化財)

『新修本草』は、李勣らが顕慶4年(659)に高宗の勅命を受けて編纂した中国最古の勅撰本草書。梁の陶弘景の『神農本草經集注』を刪定して新注と新薬を増添したもので、全850種の薬物を収載する。中国では宋元の間に亡佚したが、日本では京都仁和寺に鎌倉時代の鈔本5巻が伝えられており、国宝に指定されている。本書は、巻15禽獸部の残巻で、仁和寺本の僚巻である。巻末に天平3年(731)の紀年をもつ本奥書がある。福井崇蘭館旧蔵。



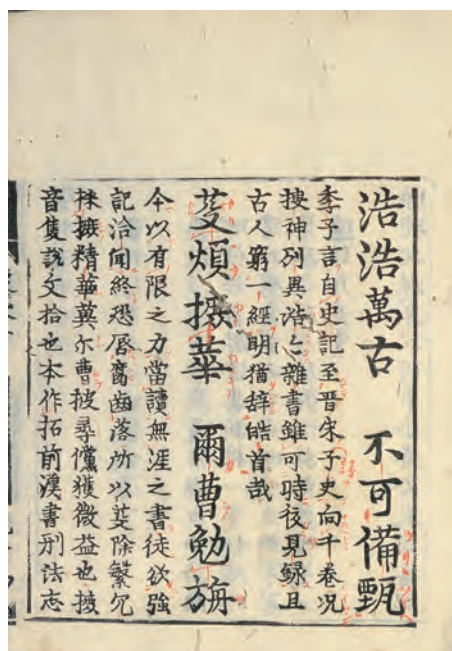
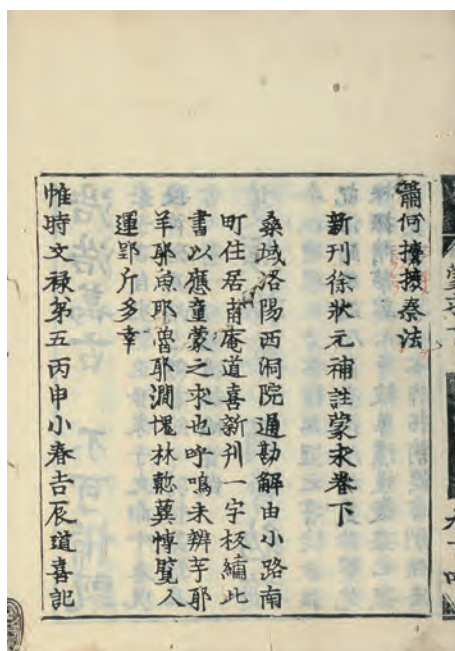
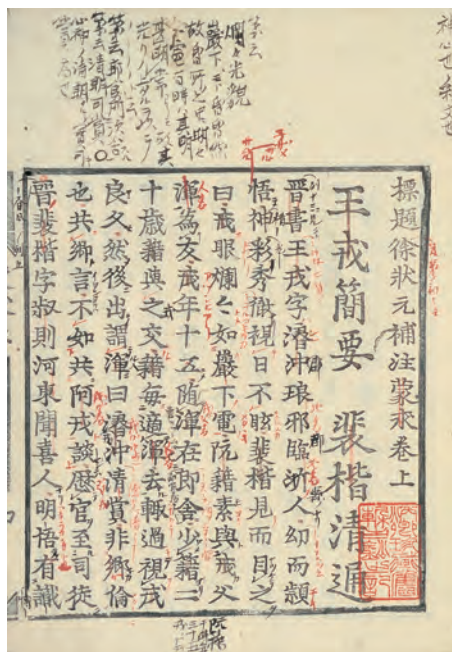
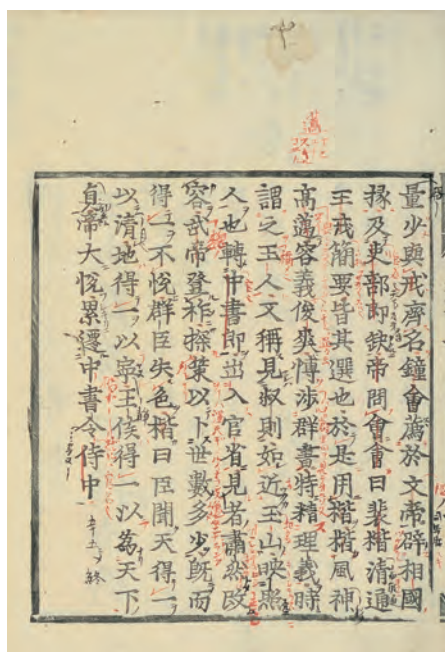
29 群書治要 50 卷 47 冊 駿河版銅活字本 (恭42)

『群書治要』は、唐の魏徵らが貞観5年(631)に太宗の勅命を受けて、經書をはじめ正史や諸子の書60数種から、為政者の参考となる箇条を抜き出してまとめたもの。中国では早くに散佚し、日本にのみ伝存する。本書は、徳川家康が元和2年(1616)に出版させたもので、底本には金沢文庫所蔵の清原教隆鈔本(現宮内庁書陵部蔵)を用いたが、当時すでに3巻が失なわれており、また出版の際の誤植も少なからず見られる。水色表紙の原裝本。



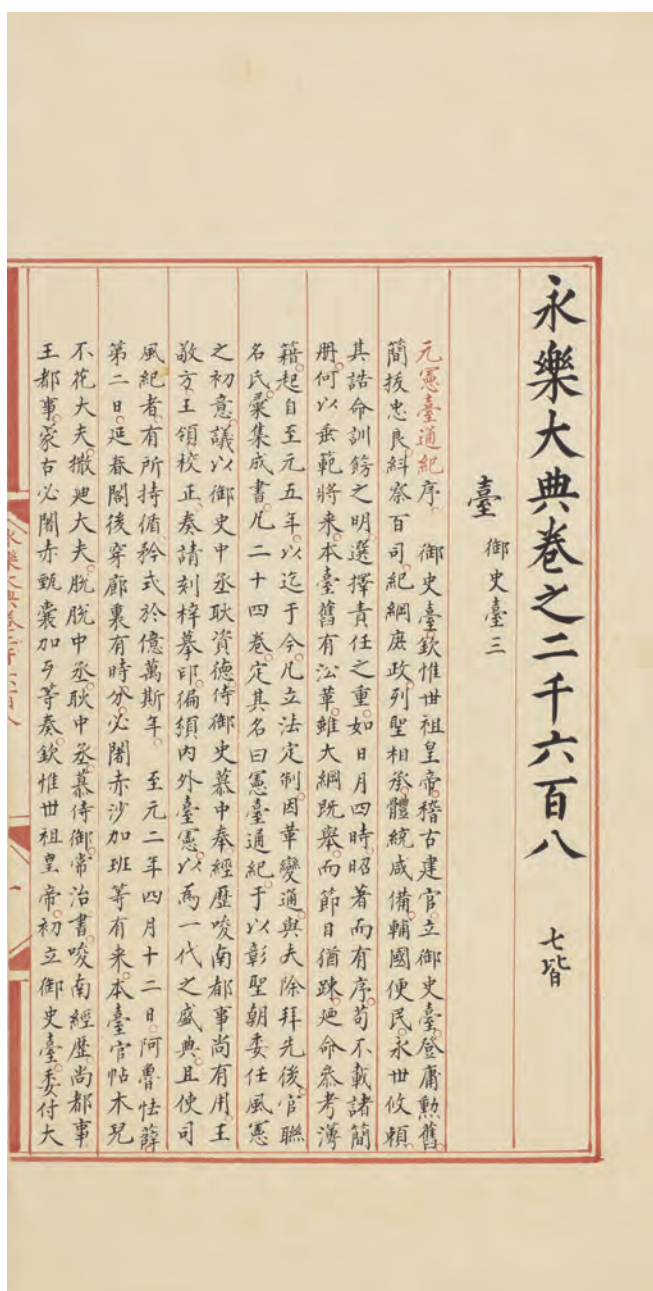
30 標題徐狀元補注蒙求 3卷3冊 文禄年刊活字本 (恭40)

『蒙求』3巻は、唐の李瀚が児童教育のための教科書として、歴史上の人物の故事を4字句1対の韻文にして、読誦の便をはかって編纂した書。古注本と徐子光補注本とがあるが、前者は平安時代、後者は鎌倉時代に日本にもたらされ、広く普及し盛んに学習された。本書は、小瀬甫庵(道喜)が文禄5年(1596)に刊行した補注本。初期の活字印刷本として著名であり、その字体や版式はやや稚拙である。全巻に朱墨の付訓注記がある。



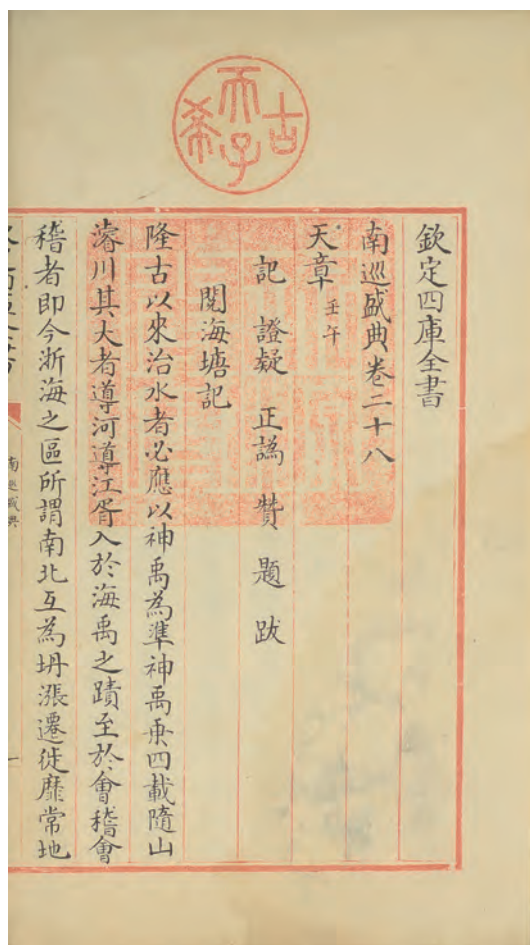
31 永樂大典零本 1冊 明嘉靖鈔本 (恭91)

『永樂大典』は、明の成祖(在位1402～24)が解縉らに命じて編纂させた中国史上最大の類書(百科事典)で、本文2万2877巻、凡例目録60巻、全1万1095冊、永樂7年(1409)に完成した。その後、嘉靖36年(1557)に宮中の火事で危うく焼失しかかったため、世宗(在位1521～66)は万一に備えてあらためて副本1部を作成させた。本書は嘉靖の副本で、巻2608と巻2609である。巻末に重録総校官侍郎臣高拱ら6名の列銜がある。巻2608は『憲台通記』、巻2609には同書の続集を収める。版式その他は原本と同じとされる。



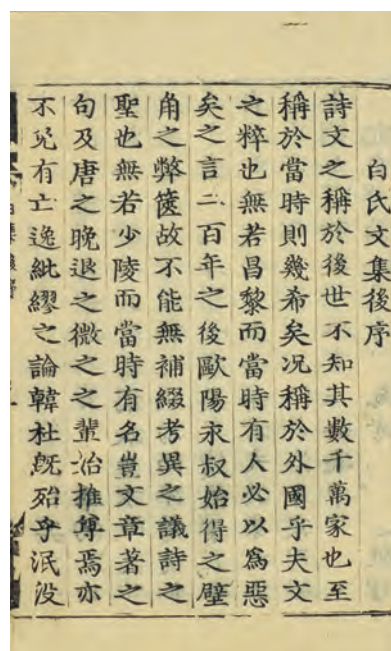
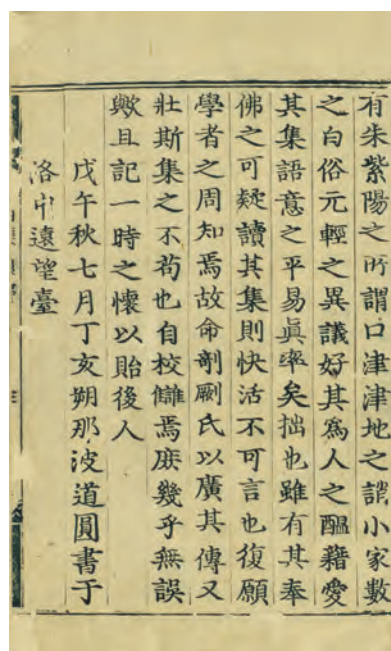
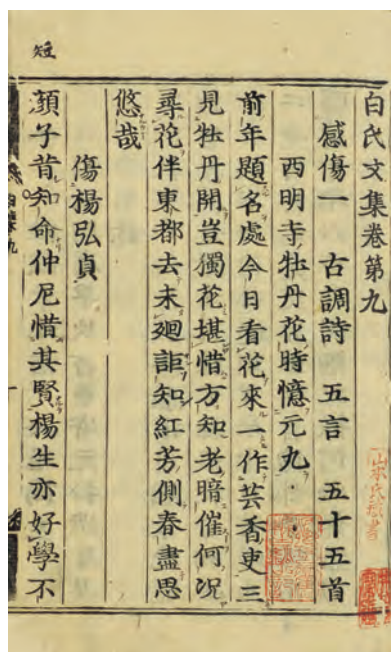
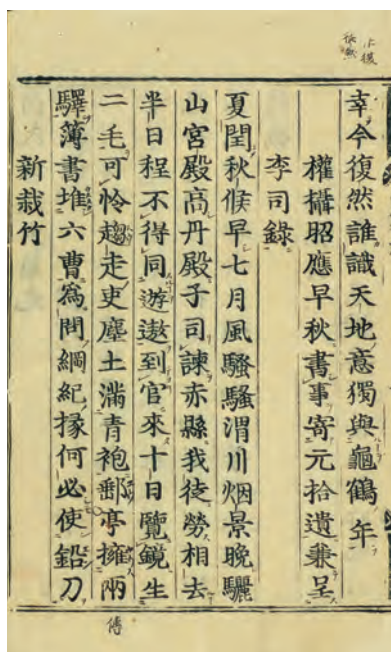
32 欽定四庫全書零本 2 卷 1 冊 清乾隆鈔本 (恭92)

『四庫全書』は、清の高宗(在位1735~96)の命によって乾隆37年(1772)から同47年にかけて編纂された漢籍の一大叢書。經・史・子・集の4部にわたる重要な古書を洩れなく収める。当初、鈔本4部を作成し、北方の4地に建てた文淵閣、文溯閣、文源閣、文津閣に収蔵した。本書は、咸豐10年(1860)の英仏連合軍の北京入城の際に焼け残って民間に流出した北京円明園内文源閣の旧蔵本であり、内容は『南巡盛典』巻28、29である。巻首に「天子古希」「文源閣宝」、巻尾に「天主信人」「円明園宝」の朱印がある。装潢は史部書を示す紅色の絹表紙。



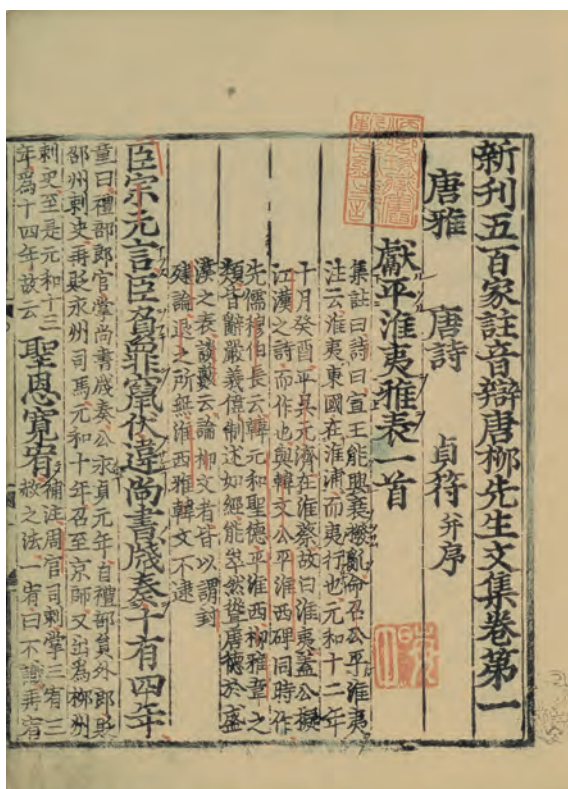
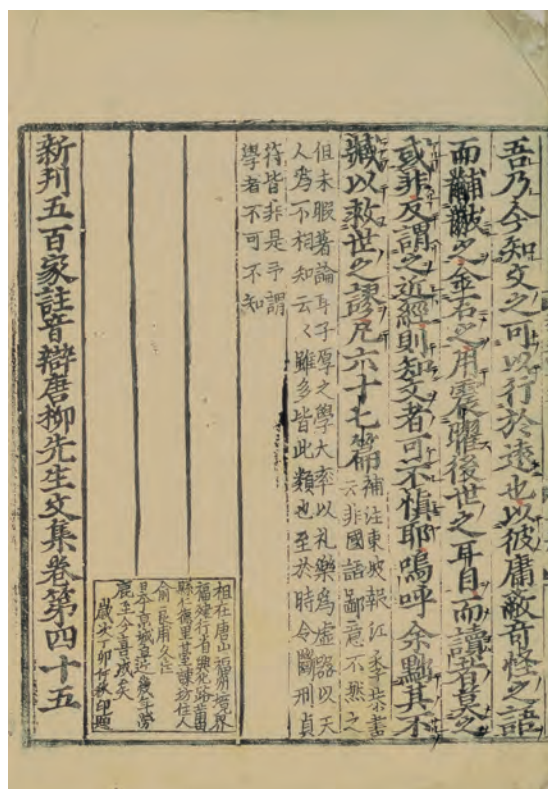
33 白氏文集 72 卷 元和活字本 (恭58)

『白氏文集』は唐の白居易 (772~846) の詩文集。元稹 (779~831) 編の『白氏長慶集』50 卷 (824 年成立) に自撰の後集 20 卷、続後集 5 卷を加えたもの。現本は本文 71 卷と目録 1 卷。日本には留学僧慧萼によって写本がもたらされ、博士家に伝承されて知識人の教養書として重んじられた。本書は、元和 4 年 (1618) に那波道円によって刊行された木活字本である。目録および巻 1 から巻 8 までを欠く。多くの巻に墨書の付訓および校合の書入れがある。



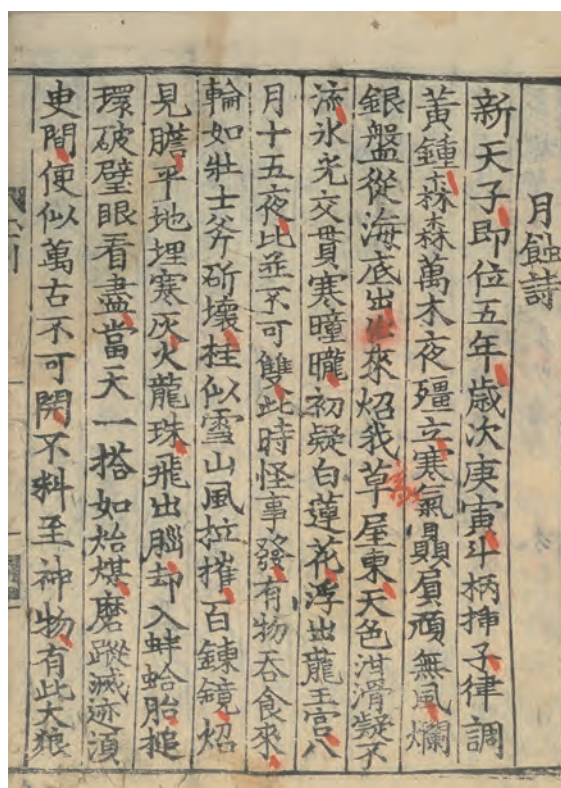
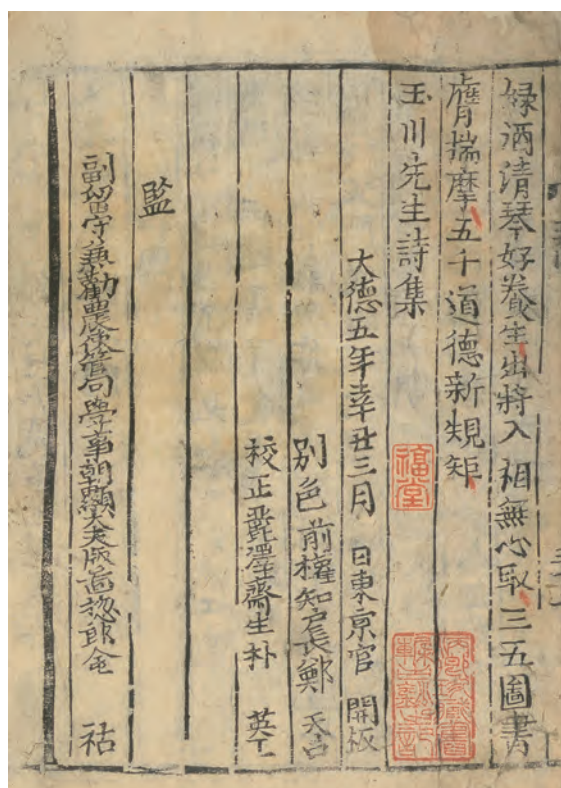
34 新刊五百家註音弁唐柳先生文集 45 卷 首 1 卷 12 冊 南北朝刊本
(恭34)

唐の柳宗元(773~819)の詩文集、宋の魏仲舉編。柳宗元は、韓愈(768~824)とともに六朝以来の美文(四六駢體文)を廃し、古代の自由な文体に帰ることを主張した古文運動の中心人物で、唐宋八大家のひとりとして著名。本書は、元末に日本に渡来した刻工のひとりで、福建莆田の人兪良甫が嘉慶元年(1387)に版刻したもの。兪良甫はこの他にも多数の禅籍・漢籍の開版に従事した。全巻朱墨の付訓および室町時代の頭注書入れがある。



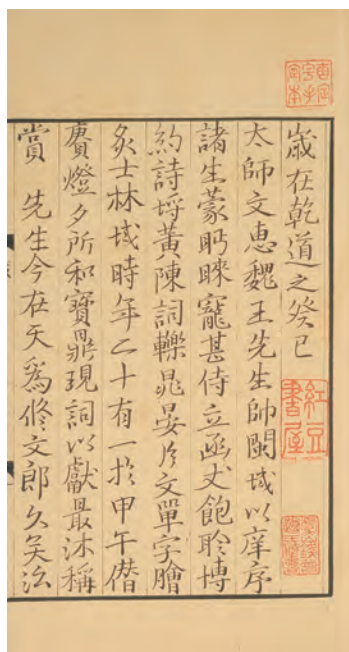
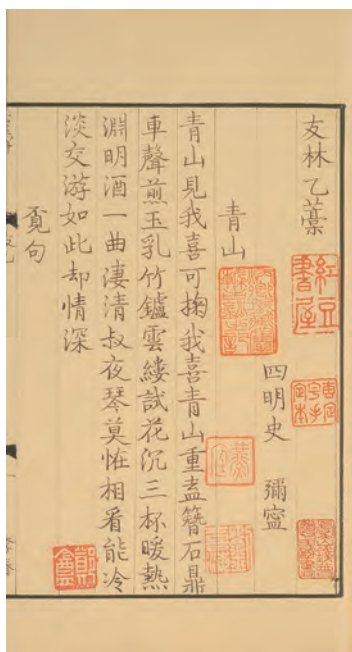
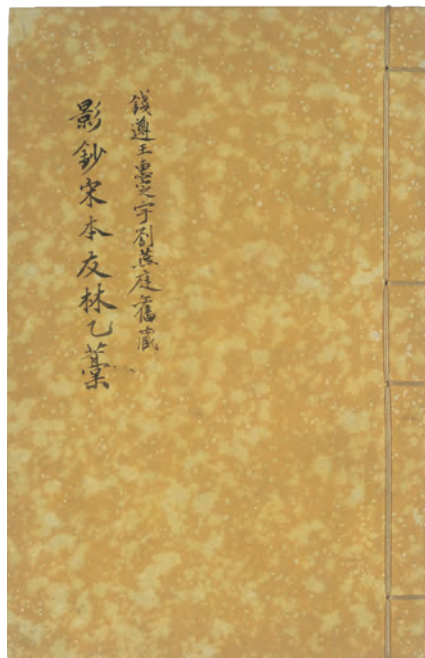
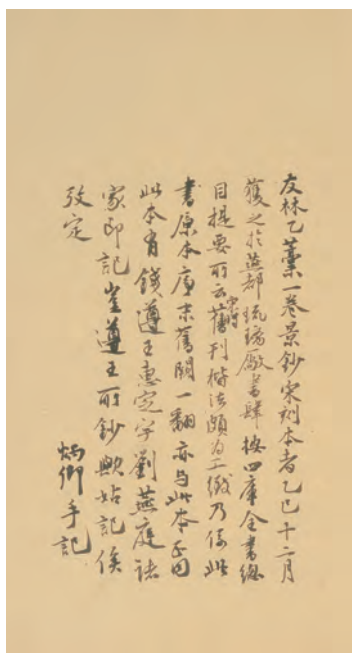
35 玉川先生詩集 1巻1冊 高麗刊本 (恭63)

中唐の詩人盧仝(768?~835)、号は玉川子の詩集。盧仝は生涯仕官せず、洛陽の下町に住んで世人との交際を好まなかったが、韓愈にその詩才学問を高く評価された。彼の詩集の原刊本『玉川子詩集』は2巻で、他に外集1巻があった。本書はその抜抄本でもあろうか。巻首に目録のみを存し、序跋などはない。巻尾には大徳5年(1301)の高麗の官版であることを示す刊語があるが、版式はやや稚拙である。



36 友林乙藁 1巻1冊 影鈔宋本 (恭95)

『友林乙藁』は宋の史彌寧の詩集で全170首を収める。史彌寧は字は安卿、鄞県(浙江)の人。南宋の宰相史浩の従子で、嘉定中(1208~24)に邵陽(湖南)の長官となった。本書は宋刻本によって影鈔したものである。出版年などは不詳であるが、清代の著名な蔵書家の錢曾(字は遵王、1629~1701)、同じく考証学者の惠棟(号は定宇、1697~1758)さらには清末の蔵書家の潘祖蔭(号は鄭盦、1830~90)の印記などがある。また、巻端の副葉には内藤湖南の識語が書されている。



37 天游閣集 4冊 手稿本 (恭94)

『天游閣集』は、清の顧太清(1799~1877)の詩文集で、第1、2冊は詩7卷、第3、4冊は東海漁歌6卷を収める。顧太清は高宗(在位1735~96)の玄孫奕絵の側室。名は春、字は子春、太清または雲槎外史と号した。また、自署は太清西林春。才色ともに恵まれ詩翰に巧みで、その筆跡は世に珍重された。書室を天游閣という。本書は序跋並びに目録を備えない。秩の外題に「原鈔足本」と記し、著者の自筆稿本だという。ただし、詩卷6、7は別筆である。

天游閣集
詩七
次湘佩寄梅花詩角韻
雲槎外史太清春著

獨立閒庭風颯颯
長藤斜掛小塘光
雲階月地難同賞
惆悵離人各一方
吾道艱難今已矣
空囊羞賦一文錢
賞心剩有階前草
無數分明滿院鮮
白酒初成紫蟹肥
清秋何故燕飛飛
可能啣得青箋去
點綴官衙補壁衣
積滯平輝水浸楹
京都多雨感蚊蟲
夜深自起移燈照

天游閣集
詩一
游仙四首
太清西林春著

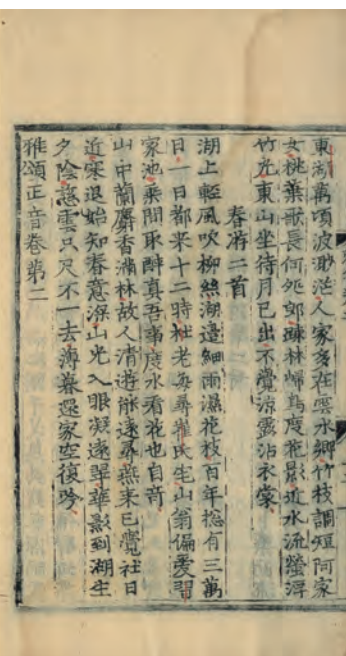
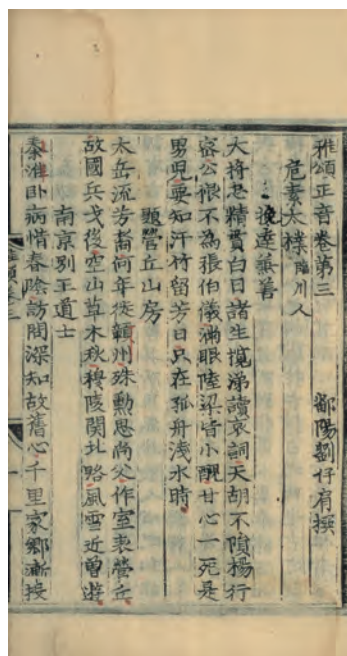
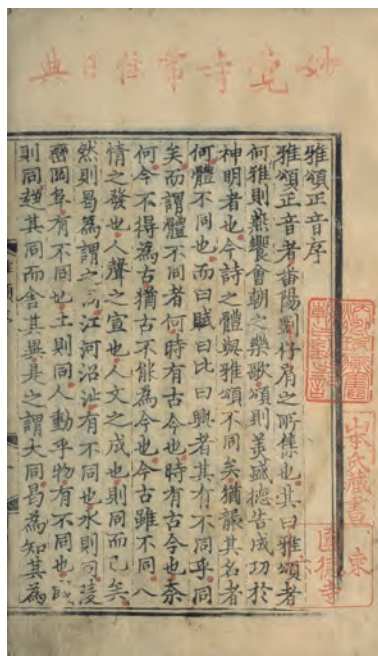
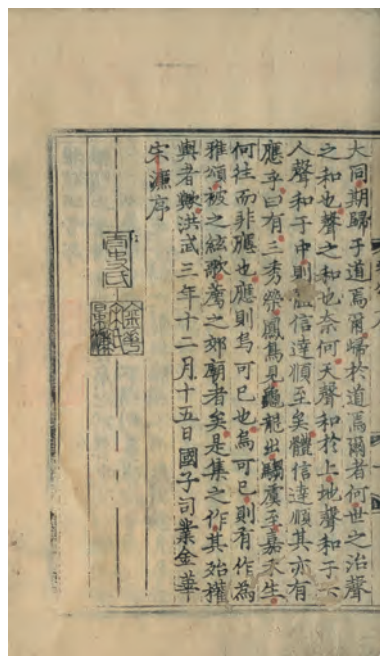
層臺起虛館
桂柱蘭為堂
微風從東來
吹動羅衣裳
翻塔木芍藥
薜荔當門墻
揮杯發清興
絃歌誦詩章
繁星映戶牖
明月照兩廂
為樂及良時
光景孰云長
縹緲十二樓
上有仙人居
左據青玉案
右擁鴻寶書
瓊瑤製危冠
芙蓉曳輕裾
歡笑集玉函
從容下丹除
俯察碧流水
清波戲朱魚
仰觀青天雲
舒卷任太虛
巫山高巍巍
江水碧深沓
中有陽臺人
清容舒窈窕
翠

猪毛菜
春風入山谷
居人挑野菜
一種名猪毛
茸：嫩適蔬可以具盤餐
可以佐羹膾
老為北蓬科
棄之無人愛
團團住風吹
紛：隨日飄不知古何名
鑒予見聞隘
余七十七歲
雙目失明更兼嗚嗽夜不得寐
枕上口占此律以紀其苦
多病總緣多壽故
病中最苦目光曉
空花又被浮雲瘴
坎水難將離火降
從此豈能書下酒
可憐不見月當窓
寒食徹夜難成寐
數盡長更聽吹瓦
悼庚姬兼慰蓋臣夫婦
姬乃姪孫溥顧侍兒性沈

默寡言笑不好莊飾
十六歲工女紅
善裁剪
離盛暑嚴寒針線不丟手
及一切事務無不精心故深得主母憐
於是秋忽染時症遂而長往
唐人有彩雲易散琉璃翠之句誠所謂也
纔見幽雲現投遞惡煞侵剪
閨素手刺綉冷金針
難釋王孫意
空傷大婦心
小星光慘淡
長夜漏深沉
穩帳燈前召幽思
夢裏尋玉簫
緣未盡或可再來臨
夢中讀隋書得此二絕句
雖未倩人代寫
盲人夢話可發一笑
二主相逢何所問
展覽曲記來真暮
蘭秋菊當時秀不

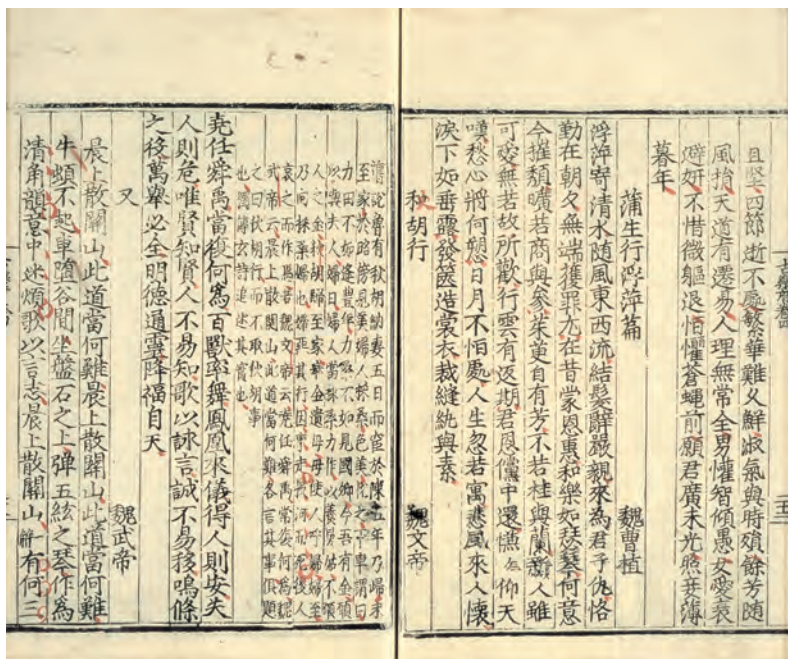
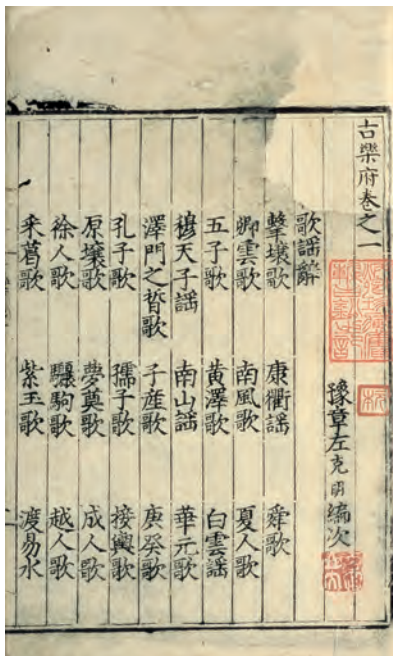
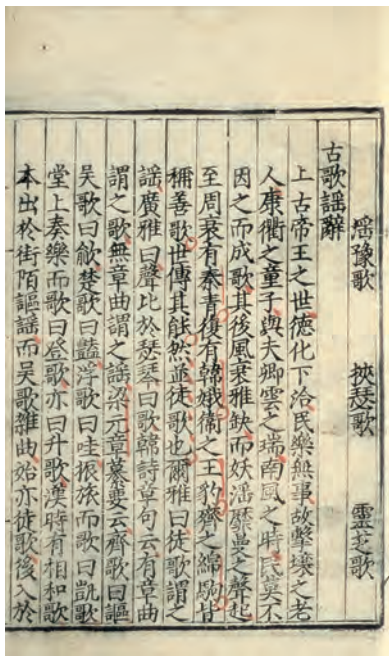
38 雅頌正音 5 卷 1 冊 室町時代刊本 (恭31)

明の劉仔肩の編。劉仔肩は、字は汝弼、鄱陽（江西）の人。太祖（在位1368～98）の初め召に応じて都に上り、当時の公卿から僧侶まで50余人の詩を集め、自身の詩をも加えて『雅頌正音』を編んだ。『雅頌正音』によってのみ伝わる明人の詩も少なくない。本書は、洪武年間（1368～98）の刊本による室町初期の覆刻と考えられている。本書は伝本極めて少なく、内閣文庫および尊経閣文庫に各1本を伝えるのみである。なお、洪武刊本が静嘉堂文庫に架蔵されている。



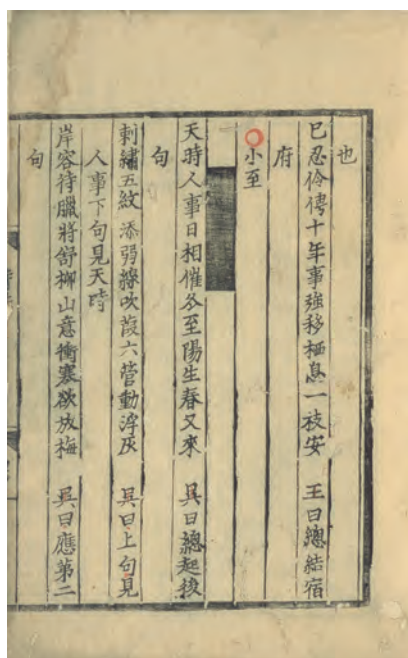
39 古楽府 10 卷 3 冊 元刊本 (恭16)

元の左克明の編。古楽府とは、古典詩の形式のひとつで、唐代に作られたものを新楽府というのに対し、それ以前に作られたものを古楽府という。本書は、左克明が先行する宋の郭茂倩『樂府詩集』の分類を参考に新たに編纂したものであり、作品の解題なども郭氏のそれを踏襲しているが、編集方針は異なっている。本書は元末の刻本と考えられており、全巻に朱点、校合および頭注、書入れがある。



40 詩法源流 1 卷 1 冊 室町時代刊本 (恭32)

『詩法源流』は作詩法に関する指南書。撰者の楊載(1271~1323)は杭州(浙江)の人。40歳を過ぎて出仕し、翰林国史院編修官などを歴任。趙孟頫に文章を賞讃され、虞集、范梈、揭傒斯らと共に元詩四大家に数えられる。本書は、卷末に「延文己亥春雲居比丘妙葩命工刊行」の刊記があり、延文4年(1359)の刊行と知られる。妙葩(1311~88)は、五山の禅僧。道号は春屋、諱は妙葩。夢窓疎石の俗甥にあたる。本書は他に伝本を見ない希観書である。



41 洞真高上玉帝大洞雌一玉檢五老宝經殘卷 1 卷 敦煌写本 (羽612)

本書は黄染の麻紙に端正な楷書で書かれている。首尾を欠き経題などは確認できない。全9紙。『敦煌秘笈』の原題は「大洞真經」となっているが、正確には正統道藏中の『洞真高上玉帝大洞雌一玉檢五老宝經』1巻に比定される。一部に錯脱が見られるが、おおむね道藏本の2葉表から11葉表、28葉表から31葉表、47葉裏に相当する。本經は上清經類に属し、誦經と存思と祝詞とによる昇仙を説いている。

八閭玄母而面右迴八系輪綸百方飛行布散
大洞聖靈凡真受炁元父北方經體齊奈
落展空於是父存照者則金華曜於東華玉
形現於帝門神映五老騰躍三元靈羽披
空蒸結慶雲又能身生水火放光万刃頑負
寶曜浮提孔展亦示散景位為上真故得
此道者上為虛皇之真共此道者下入九地
之策此道之決乃洞靈大哥文雌雄混一帝
君受微太一保神玄母聖授三五七九轉
齋暉元靈景曜元英而極極真致也寶難
外帝是用內思振滯寶暢者也所以仙可求
也以精至為難真人可見養志性為難万靈
可使繫解為難是以太一帝君以紫房為混
合元父玄母以三胎為神明八素隱玄以真
思為上首秘言要妙以九真為內經神法以
精思為至深反童以微真為得靈大洞以高
上為元始太丹以雌一為內精五老以自默為
晨尊太上以元英為玄清黃老以志性為道
本曰元以契領為入真人以炁合而相降仙
要以精感而道成於是雌一進於炁凡帝
君守於六宮大洞詠於新室八音散乎九
空七考受慧於胎仙獲天福於神方慶元
父於靈都賀玄母於玉房積感養乎一寸愛
鍊廚手背峰眼眈九晨身登華嶺巍巍深
奧福不可量此皆寶設之貴行子思而為之
則曰曰非天矣

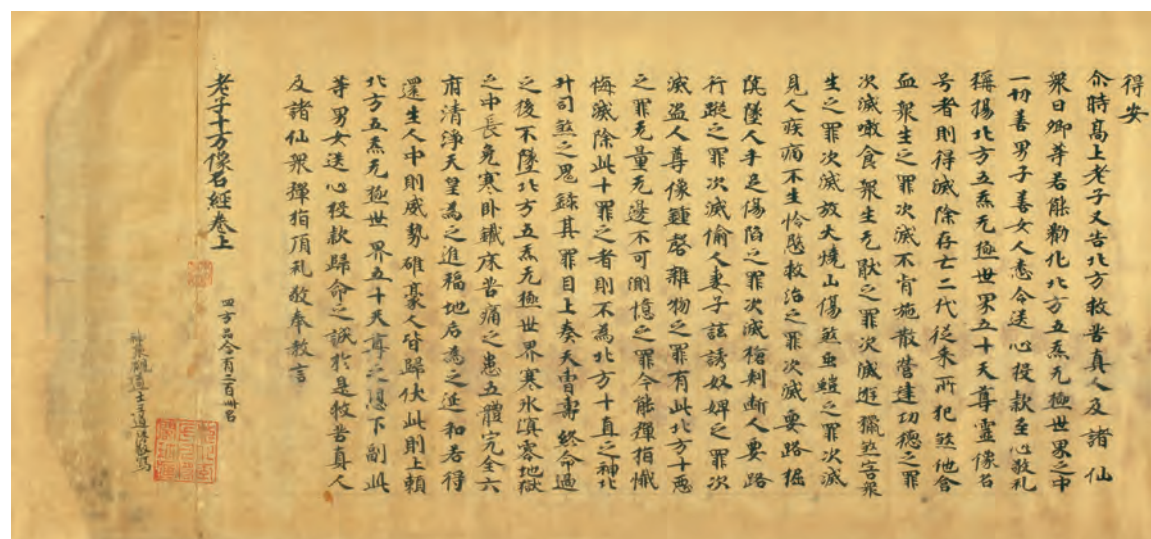
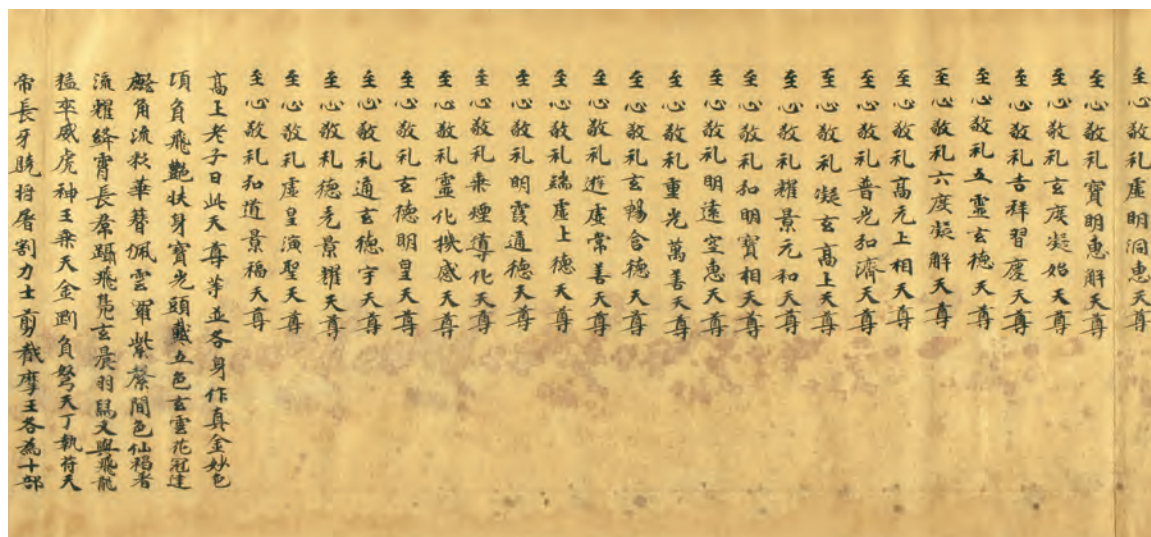
欲讀大洞真經者當先讀高上帝君十二願
玉清玄母八門行間次又讀中央黃老洞房
五神經三年乃得受讀大洞真經也所以道
引神津通撒靈源保固紫房梁明泥丸攝養

五神經三年乃得受讀大洞真經也所以道
引神津通撒靈源保固紫房梁明泥丸攝養
太一開釋三關守鏡七轉挺和六神混合三
五万化九玄者也轉習胎炁日曄太元容典
幽靈神啓空虛十二之類與生而俱八閭之
行合真而遊黃老所守高上所書故曰雌一
洞房之初也讀之万遍亦得不死之道也但
未得越景浮空疎軒落處仰瞻絕壑騰躍三
玄又未得命駕八景控霄九晨人未得北入
玉清非為高真可唯讀大洞真經當得此舉
矣然行唯一者當懇苦感會研真極微三年
之後乃得受讀大洞真經可要當先守太一
混合帝君變化雌雄存理凡真次詠大願十
二相連又唱八門玄母之間次讀太洞洞房隱
玄以定不死是曰必仙也

夫稱元君者皆女子之神也雌一洞房三素
元君者是也當先存念洞房三素真元君三
年乃得及讀大洞真經可大洞所以為真經
者謂存念三元君之難也微微玄精思感
感至若存見三素三元君者則真入之道畢
矣曰素元君者乃是右白元君之母也子存
念曰元君之母玉精者仙道成也黃素元君者
則是中央黃老君之母也子存見之則壽万
年万年之外乃非三玄可紫素元君者則是
左元英君之母也子存見之則為真人之玉
精也若存思洞房而寂頓見三元君者使即
白曰外天佩流鈴帝符遊行上清太丹隱書
以三素為至精此之謂也洞房三素元君
曰元元黃素老君之母故号曰三素三元君
皆女子也三女子又共一母其母曰太太素

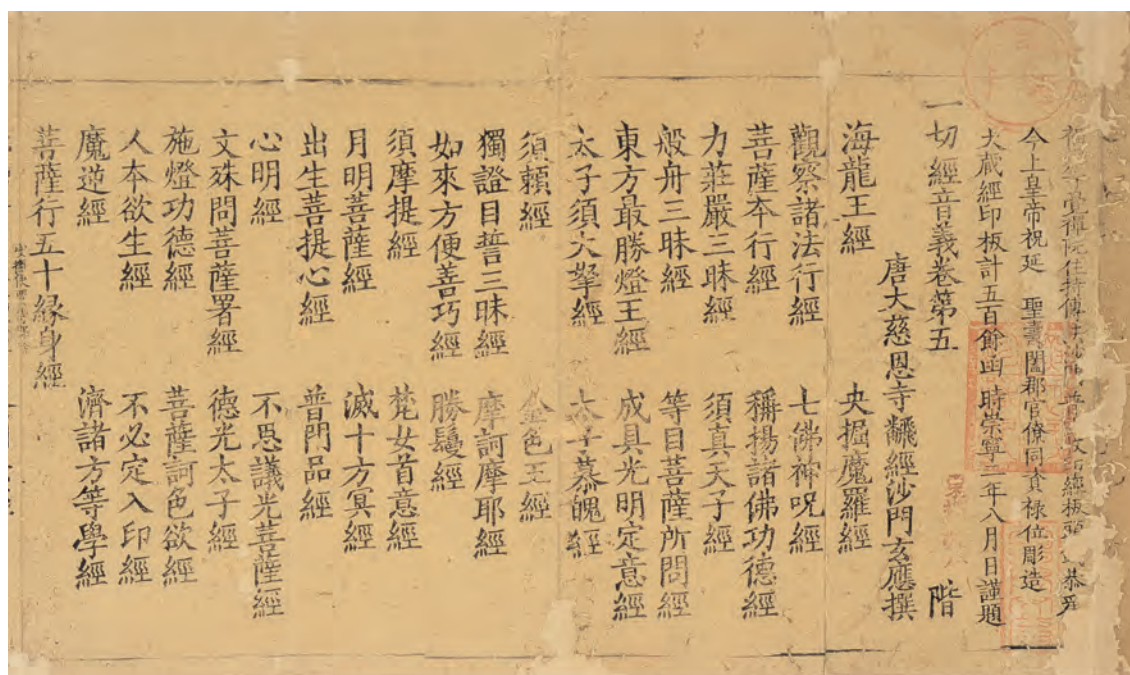
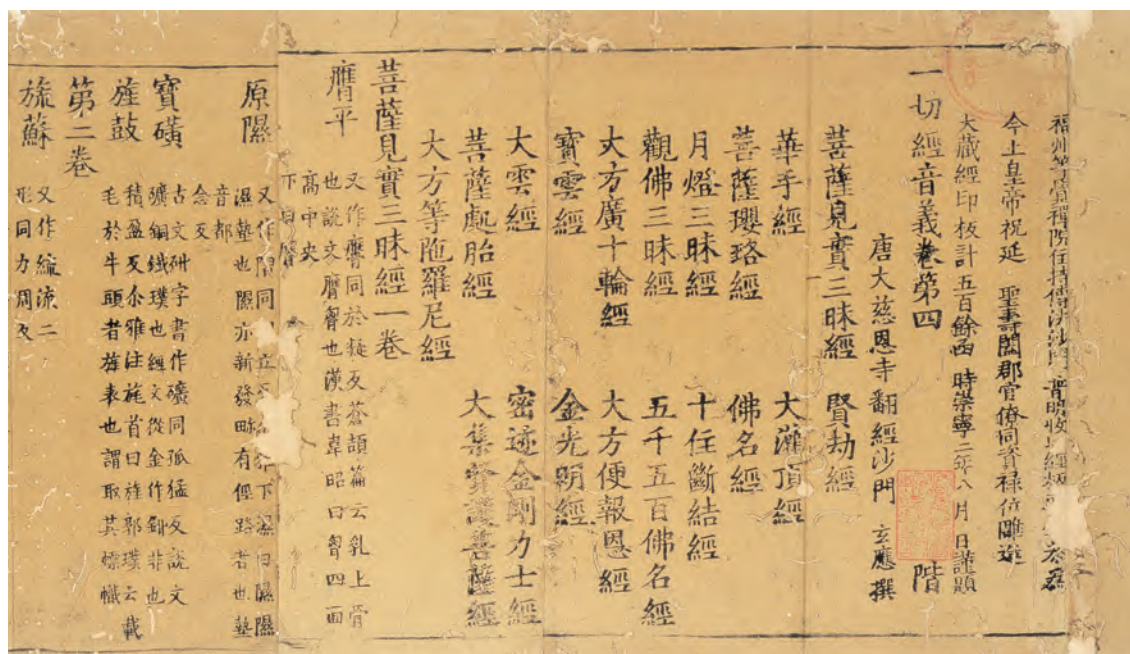
42 老子十方像名經卷上殘卷 1 卷 敦煌写本 (羽638)

本書は黄染の麻紙に端正な楷書で書かれている。全 14 紙。首を欠くが尾題は「老子十方像名經卷上」とあり、尾題の下に「四方品合有二百冊名」と細字で書し、さらに「神泉觀道士王道深敬写」との識語がある。神泉觀は敦煌にあった道觀。仏典の仏名經類に対応して作られた道教經典である。正統道藏中には『老子像名經』4 卷があるものの、高上老子の誥授部分が本書とほぼ同じであることを除いて、敬礼の対象である天尊名などは一致しない異本である。



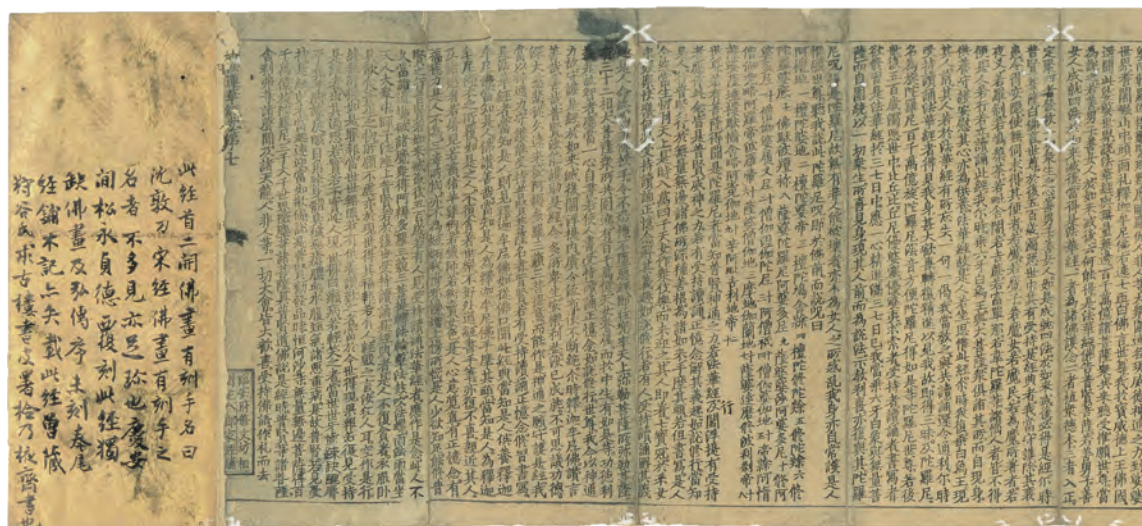
43 一切經音義 25 卷 2 帖 北宋刊本 (恭 6)

『一切經音義』は、唐の玄奘の撰。仏典中の難解な字句についての字音や字義に関する注釈書。7世紀半ばの成立。現存する音義書としては最古のもの。撰者の玄奘は、長安の大慈恩寺で玄奘の仏典翻訳事業に従事した僧侶。本書は、崇寧2年(1103)に福州閩県(福建)の白馬山東禪等覺禪院の住持普明が皇帝の長寿を祈願して開版した東禪寺版大藏經の零本で、卷4、卷5を存する。『一切經音義』の刻本としては最も古いもののひとつ。もと京都三聖寺の所蔵。



44 妙法蓮華經 7 卷 1 帖 南宋刻本 付妙法蓮華經 7 卷 1 帖 江戸時代影刻本 (恭 7)

姚秦の鳩摩羅什(344~413)の訳。恭 7 は 2 種の『妙法蓮華經』を含む。1 本は、南宋の坊刻の細字経で、巻首に線刻の釈迦說法図が置かれる。一般に細字経は 1 行 34 字の版式が多いが、本書は 30 字ないし 34 字と不等であること、說法図に「沈敦刀」と刻工名が刻まれていること、本文に読点を刻入していることなどの特色がある。狩谷敏斎旧蔵本で西園寺公望の手を経て内藤湖南に譲られたもの。もう 1 本は、慶安 3 年(1650)に松永貞徳(1571~1653)が上記南宋刻本を影刻したものである。巻末には影刻の趣旨を記した貞徳の跋文がある。



南宗刻本

45 法華玄義序 1 卷 1 帖 本国寺版活字本 (恭39)

『法華玄義』10 卷は、隋の智顗(538～97)が『妙法蓮華經』の經題の文字それぞれのもつ奥深い意義(玄義)を講説したのを、弟子の灌頂(561～632)が筆記したもの。本書はその序文として添えられた灌頂の「法華私記縁起」のみを刊行したものである。卷末の跋文によれば、本国寺の僧一輪房日保が文禄4年(1595)に100部刷って奉納したことが知られる。古活字印本のうちでも最も古いもののひとつとされる。

法華私記縁起
沙門 灌頂 述
大法東漸僧史所載誰有幾人不曾聽講自
解佛乘者乎縱令發悟復能入定得陀羅尼
者不縱具定慧度帝京弘二法不縱令盛
席謝遣徒眾隱居山谷不縱避世守玄被徵
爲二國師不縱帝者所尊本極殿對御講仁
王般若不縱二殿宣揚爲主上三禮不縱令
萬衆屈膝百高座百官稱美讚歎彈指宣願
不縱道俗顯彰玄悟法華圓意不縱得經意
能無文字以興說辨晝夜流瀉不唯我智
者具諸功德幸哉灌頂昔於建業始聽經文
次在江陵奉蒙玄義晚還台嶺仍值鶴林
荆楊往復途將萬里前後補接纔聞一徧非
但未聞不聞亦乃聞者未了卷舒鑽仰彌
覺堅高猶恨緣空不再不三諸論無地如鑽
思乳並復惟念斯言若堅將來可悲但聖
明若樹若石今經稱若田若里聿遵聖典書
而傳之玄文各十卷或以經論誠言符此深
妙或標諸師異辭驗彼非圓後代行者知
露之門也茲
序王
所言妙者妙名不可思議也所言法者十界
十如權實之法也蓮華者譬權實法也良
以妙法難解假喻易彰況意乃多略擬前後
合成六譬也一爲蓮故華譬爲實施權文云

爲品衆次三首名爲第一釋曰談記是法名
會冥是敘圓珠是敘宗俱寂是敘用四華
六動是敘教本迹可知
此妙法蓮華經者本地甚深之奧藏也文云
是法不可示世間相常住三世如來之所證
得也文云是華一寂滅於道場知已大惠因
緣出現於世始是我身令入佛慧爲未入者
四十餘年更以異方便助顯第一義今正直
捨方便但說無上道所言妙者褒美不可
思議之法也又妙者十界十如之法此法即
妙此妙即法無二無別故言妙也又妙者自
行權實之法妙也故舉蓮華而況之也又妙
者即迹而本即本而迹即非本非迹或爲開
廢云云又妙者最勝脩多羅甘露之門故言
妙也釋曰妙無別體體上褒美者敘妙名也
妙即法界法界即妙者敘體也自行權實者
敘宗也本迹六喻者敘用也甘露門者敘教
也
奉寄進 法華玄義序 百部
文禄四年 曆極月二十四日
大光山本国寺常住 願主一輪房日保



内藤湖南先生肖像 太田喜二郎画 (洗197)

第 77 回 杏雨書屋特別展示会

「杏雨書屋の善本漢籍 ― 恭仁山莊本を中心に ―」

編 集	公益財団法人 武田科学振興財団・杏雨書屋
発 行	公益財団法人 武田科学振興財団
	理事長 飯 澤 祐 史
	〒541-0045 大阪市中央区道修町二丁目3番6号
発行日	2023年10月23日
印 刷	はまや印刷株式会社

杏雨書屋の活動

展 示

■展示室開館時間
午前 10 時から午後 4 時まで

展示室には常時、蔵書や巻軸を解説付きで陳列し、来館者の参観に供しています。春と秋には特別企画の展示会を開いています。

閱 覧

■閲覧時間
午前 9 時から午後 4 時まで

図書の閲覧を希望される方は、閲覧申請書に所定事項を入力して御申込み下さい。複写、写真撮影、掲載等はそれぞれの規則によっていただきます。

休 館 日

土曜日・日曜日・祝祭日・年末年始
その他当館の行事に伴う臨時休館日

刊 行

科学技術振興の一環として出版物を刊行しています。

〔刊 行 書〕

杏雨書屋蔵書目録	1982 年
新修恭仁山莊善本書影	1985 年
本草書の研究 渡辺幸三著	1987 年
杏雨書屋図録	1998 年
本草学研究 森鹿三著	1999 年
新修本草卷十五獣禽部 (影印本)	2000 年
宝要抄 (影印本)	2002 年
備像食物本草 (影印本)	2003 年
穀類抄 (影印本)	2004 年
生薬・薬用植物語源集成 内林政夫 著	2004 年
宋版 備急総効方 (影印本)	2005 年 3 月
杏雨書屋洋書目録	2006 年 1 月
杏雨書屋所蔵 書簡集 I、II	2006、2009 年
水谷本草 I～IV (原色 翻字本)	2005～2008 年
香字鈔 (影印本)	2007 年 3 月
黄帝内経太素 (影印本)	2007 年 4 月
香要抄 I、II (影印本)	2008、2009 年



杏雨書屋所蔵 医家肖像集、二編	2008、2018 年
敦煌秘笈 目録冊～影片冊Ⅸ (影印本)	2009～2013 年
本草品彙精要 I～VI (複製本)	2010～2012 年
本草品彙精要 解説・目録・索引	2015 年
薬種抄 I、II (影印本)	2010、2011 年
毛詩正義 I～IV (複製本)	2011～2013 年
宇田川榕菴植物学資料の研究	2014 年 3 月
杏雨書屋「松本文庫」解説・目録	2014 年 3 月
曲直瀬道三と近世日本医療社会	2015 年 10 月
本草・薬物の研究 宮下三郎著	2016 年 1 月
杏雨書屋蔵 積砂版大蔵経目録 I～XI	2017～2023 年
杏雨書屋所蔵 病草紙模本集成	2017 年 3 月
敦煌秘笈 景教經典四種	2020 年 9 月
日本近世医学史論考 I・II 町泉寿郎著	2022 年 3 月
医聖像集	2022 年 3 月
定期刊行物 紀要「杏雨」	1998 年創刊

公益財団法人 武田科学振興財団

きょう う しょ おく
杏 雨 書 屋

電話 (06) 6233-6108

〒 541-0045 大阪市中央区道修町 二丁目 3 番 6 号

<https://www.takeda-sci.or.jp/>